

一般国道 475 号東海環状自動車道

ひろやま ひろやま  
広山 A 遺跡・広山 B 遺跡発掘調査報告

- 員弁郡東員町長深所在 -

2009（平成 21）年 3 月  
三重県埋蔵文化財センター



## 序

春の晴れた日に、広山A遺跡と広山B遺跡のある丘の上に立って北方を眺めますと、右手には、伊藤左千夫が「鯨の如し」と表現した多度山が緩やかな稜線を描いて横たわり、左手には、遠く伊吹山が白雪を冠して屹立している姿を望むことができます。

足下に目を移しますと、広い河原を持つ員弁川の悠然とした流れがあり、その氾濫原に広がる水田地帯からは、この川がもたらす豊かな恵みを感じると共に、幾度となく起こしてきたであろう洪水の爪痕を読み取ることもできます。員弁川は、古くは大川とも呼ばれましたが、そこにはこの地に暮らす人々の、この川に対する畏怖と畏敬の念が込められているように感じます。

今回、一般国道475号東海環状自動車道の建設に伴い、広山A遺跡と広山B遺跡の発掘調査を行いました。調査の結果、おもに、飛鳥時代～平安時代までの建物跡や遺物を確認することができました。

両遺跡の今回の調査区は道路建設により姿を消しますが、この発掘調査の成果が豊かで厚みのある地域史把握のための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所、東員町教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元東員町にお住まいの方々からご理解とご協力を賜りましたことに厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

## 例　　言

- 1 本書は、三重県員弁郡東員町長深字広山はかに所在する、広山A遺跡（第1次）と広山B遺跡（第1次・第2次・第3次）の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、一般国道475号東海環状自動車道建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査にかかる諸費用は国土交通省中部地方整備局（平成13年1月までは建設省中部地方建設局。以下同じ）が負担した。
- 3 広山A遺跡の名称は、発掘調査時には「広山遺跡」であり、原資料もその名称を使用している場合があるが、本書ではすべて「広山A遺跡」に統一した。
- 4 本書が扱う調査成果は、「一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ」とび、「一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ」としてその概要を公表しているが、本書をもって正式報告とする。
- 5 調査は、下記の体制で実施した。

委託者　　国土交通省中部地方整備局

受託者　　三重県

調査主体　三重県教育委員会

[平成12年度]

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課

主事　　今尾 宏記〔北勢町教育委員会（当時）より派遣〕

技師　　角正 力浩

現地作業　　社団法人 中部建設協会

遺跡名・面積　広山A遺跡（第1次）　　1,280m<sup>2</sup>

　　　　　　広山B遺跡（第1次）　　930m<sup>2</sup>

[平成13年度]

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課

主事　　山口 啓嗣

臨時技術補助員　田中美穂

現地作業　　社団法人 中部建設協会

遺跡名・面積　広山B遺跡（第2次）　　500m<sup>2</sup>

[平成19年度]

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究II課

主事　　勝山 孝文

現地作業　　株式会社 イビソク

遺跡名・面積　広山B遺跡（第3次）　　2,869m<sup>2</sup>

- 6 出土遺物の整理、報告書作成は平成12～15および19・20年度に行った。
- 7 本書の執筆は今尾宏記・角正力浩・山口啓嗣・勝山孝文が分担した。遺構の撮影は各調査担当者が行い、遺物の撮影は田中久生・萩原義彦・勝山孝文が担当した。全体の編集は勝山孝文が行なった。なお、文責は目次と本文に表記した。
- 8 鉄滓の自然科学分析は、財團法人元興寺文化財研究所に委託し、その結果を「附編」に掲載した。
- 9 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の機関と方々に、ご指導とご協力を賜った（敬称略）。
- 四日市市教育委員会・東員町教育委員会・藤澤良祐・松本覚
- 10 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

# 凡　　例

## 地図類

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、貝弁郡東員町都市計画図である。
- 2 測量法の一部改正により、平成14年度から世界測地系に移行しているが、本書では国土地理院発行地形図を除き、日本測地系による座標第VI系（旧国土座標）を用いている。
- 3 挿図の方位はすべて座標北で示している。なお、磁針方位は西偏6°50'（平成14年）である。

## 遺構類

- 1 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社1967年初版）を用いた。
- 2 遺構番号は、調査年次・遺構の性格にかかわらず、通し番号で付与した。
- 3 遺構図のうち、砂目のスクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。
- 4 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、凡そ以下の略記号を付けている。

S A : 柱列            S B : 据立柱建物            S D : 溝            S E : 井戸・水溜            S F : カマド  
S K : 土坑            S X : 墓葬遺構            Pit : 柱穴・小穴

## 遺物類

- 1 遺物番号は、調査年次・遺物の種別にかかわらず、通し番号で付与した。
- 2 本書での遺物実測図類は、実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、そのつど指示している。
- 3 本書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。
- 4 遺物観察表について、以下に留意点を記す。

報告番号……………挿図掲載番号である。

実測番号……………実測時の番号である。広山B遺跡では、調査次数により以下の番号を使用した。

第1次調査：1001～、 第2次調査：2001～、 第3次調査：3001～、 である。

グリッド……………出土位置である。なお、広山B遺跡の第2次調査では独自のグリッド名が使用されたが、本書ではすべて、第1次調査時に設定された統一グリッド名に変換して示した。

調査時遺構名……………本書作成以前に発行された概報や原資料に記されたもの。

調整・技法の特徴…主な特徴を内面（内：）・外側（外：）で示した。

胎土……………小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で表記した。

色調……………その遺物の代表となる色調を記載した。表記は上記の『新版標準土色帖』に拠る。

特記事項……………遺物の特徴となる事項などを記した。

## 写真図版

- 1 遺物番号は、報告番号と対応している。
- 2 遺物の写真図版は、すべて縮尺不同である。

## 本文目次

I 前言	(角正・山口・勝山)	1	IV 広山B遺跡	(山口・今尾・勝山)	17
II 位置と環境	(山口・勝山)	8	V 結語	(勝山)	38
III 広山A遺跡	(角正)	12	附編 (自然科学分析)		41

## 挿図目次

第1図 東海環状自動車道路線上遺跡	2	第13図 広山B遺跡 SB3・SB4・SB5・SB19	22
第2図 広山B遺跡共通地区割図・広山B遺跡 (第2次) 地区割図	3	第14図 広山B遺跡 SB7・SB8・SA10	24
第3図 調査区・試掘坑位置図	4	第15図 広山B遺跡 SB20・SB21・SB22・SB23	25
第4図 遺跡位置図	9	第16図 広山B遺跡 SA9・SA24・SK11	26
第5図 遺跡周辺図	10	第17図 広山B遺跡 SE14・SK15・SK16・SB1・SB2 .....	28
第6図 遺跡地形図	11	第18図 広山B遺跡構造平面図	29-30
第7図 広山A遺跡構造平面図	13	第19図 広山B遺跡調査区内地形図	32
第8図 広山A遺跡 SB5・SB6・SB7・SB15	14	第20図 広山B遺跡出土遺物実測図①	33
第9図 広山A遺跡 SX16	15	第21図 広山B遺跡出土遺物実測図②	34
第10図 広山A遺跡出土遺物実測図	16	第22図 広山B遺跡構造変遷図	40
第11図 広山B遺跡土層断面図・断面位置図	18	第23図 鉄滓切断面のXRF分析チャート	43
第12図 広山B遺跡 SK17・SB6・SF12	20	第24図 鋼治洋の顕微鏡組織・EPMA調査結果	46

## 挿表目次

第1表 路線上遺跡一覧表	3	第6表 鉄滓切断面XRF測定条件	43
第2表 広山A遺跡出土遺物観察表	16	第7表 鉄滓切断面のXRF測定結果	43
第3表 広山B遺跡構造一覧表	35	第8表 供試材の履歴と調査項目	44
第4表 広山B遺跡出土遺物観察表①	36	第9表 供試材の組成	45
第5表 広山B遺跡出土遺物観察表②	37	第10表 出土遺物の調査結果のまとめ	45

## 写真図版目次

写真図版1 広山A遺跡 調査区全景、SK4	写真図版11 広山B遺跡 S B7・S B8・S A10、 S F12
写真図版2 広山A遺跡 S B5・S B6	写真図版12 広山B遺跡 S B19・S B20
写真図版3 広山A遺跡 S B7・SK10	写真図版13 広山B遺跡 S B21・S B22
写真図版4 広山A遺跡 SK12、 S B6・SK10・SK12	写真図版14 広山B遺跡 調査前風景、 調査後風景
写真図版5 広山A遺跡 S E14・S B15	写真図版15 広山B遺跡 出土遺物①
写真図版6 広山A遺跡 S X16	写真図版16 広山B遺跡 出土遺物②
写真図版7 広山A遺跡 出土遺物	写真図版17 広山B遺跡 出土遺物③
写真図版8 広山B遺跡 調査区遠景、 第1次調査区全景	写真図版18 広山B遺跡 出土遺物④
写真図版9 広山B遺跡 第2次調査区全景、 第3次調査区全景	写真図版19 広山B遺跡 出土遺物⑤
写真図版10 広山B遺跡 S B2・S B3・S B5 ・S B6・S B4	

# I 前 言

## 1 原因事業の概要

東海環状自動車道は、名古屋市を中心とする30～40km圏に位置する四日市市・大垣市・岐阜市・瀬戸市・豊田市等の諸都市を有機的に結ぶ、延長約160kmの高規格幹線道路である。名古屋市と周辺都市の機能分担をより効果的に進め、都市内外の交通混雑緩和を図り、都市全域の道路機能の回復を図るものである。三重県の北勢地方では道路網の充実、四日市港の集積拡大による活性化、内陸部の適正な開発等に寄与することが期待されている。

三重県内における当自動車道は、四日市北JCTで第二名神自動車道と分岐後、員弁川の右岸を北上して東員町及びいなべ市の員弁町・大安町・北勢町に

至る。その後、岐阜県養老町と連絡する計画になつてている。

平成2年度に「一般国道475号東海環状自動車道（北勢～四日市）」としていなべ市北勢町阿下喜～四日市市北山町の区間、延長14.4kmが事業化された。また、平成4年1月21日に三重県知事により「東海環状自動車道」の都市計画化が決定された。計画区間は四日市市伊坂町からいなべ市北勢町阿下喜で、計画延長は18.7kmである。

さらに、岐阜・三重県境～いなべ市北勢町（北勢IC（仮称））までの延長約9kmについては、平成19年4月24日に都市計画決定が告示されている。

## 2 調査に至る経緯

一般国道475号東海環状自動車道計画地内の埋蔵文化財発掘調査については、平成2年度の事業化により同年度に計画路線内の分布調査を行った。その結果をもとに、三重県埋蔵文化財センターは、平成4年度に四日市市・東員町・員弁町・大安町・北勢町・藤原町（当時。以下同）の各教育委員会と「東海環状自動車道等にかかる文化財保護連絡会議」を開催し、さらに、計画予定地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を三重県教育委員会と建設省中部地方建設局（当時。以下同）間で行った。協議の結果、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなった。

事業の開始にあたり、平成6年4月1日付で建設省中部地方建設局と三重県との間で、事業地内に存在する埋蔵文化財の適切な保護措置を講じるための事前調査について、「協定書」を締結した。また、年度毎に「委託契約」を締結し、発掘調査を実施している。その後、事業の進捗状況から平成13年3月13日付で「変更協定書」を締結した。

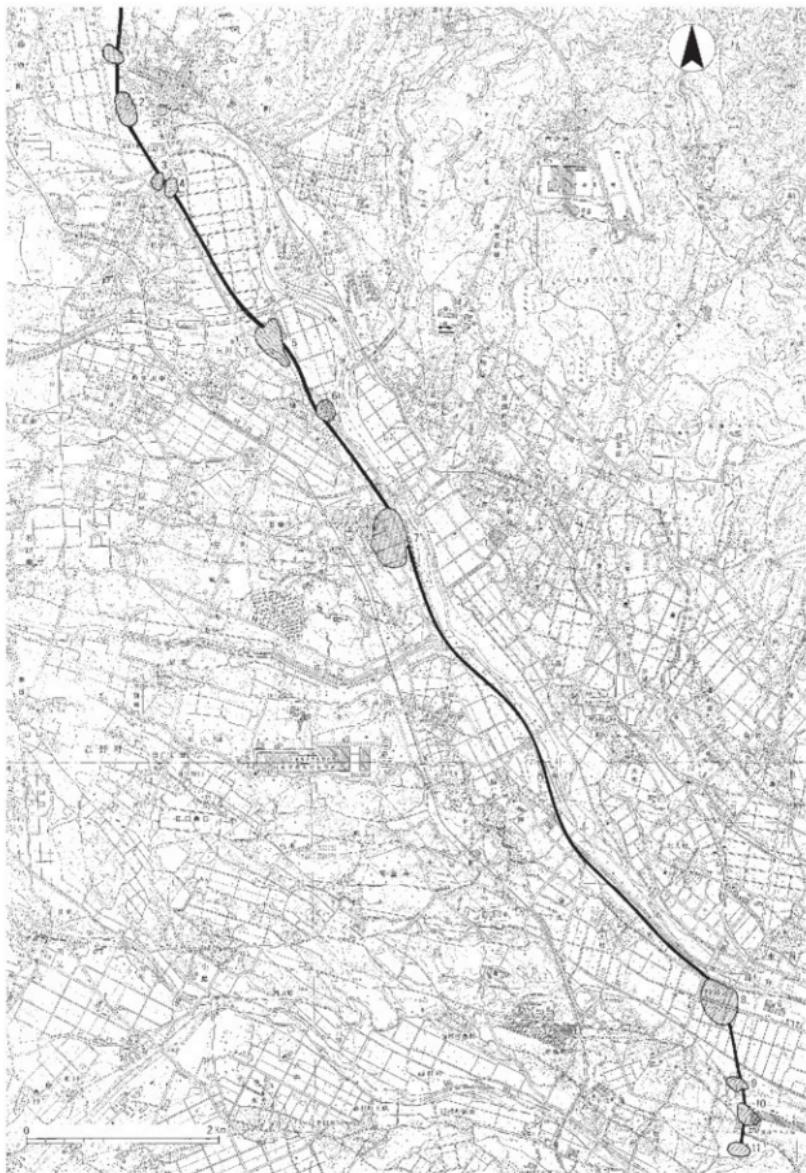
事前調査の調査主体は三重県教育委員会で、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。また、調査体制の強化・充実をはかるため「県教育委員会・

市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づき、平成7～9年度に東員町、平成10～12年度に北勢町の各教育委員会から一名ずつ職員の派遣を得た。

なお、現地作業（土工部門）は、調査の円滑な遂行を期して、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託した。このため、事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者間で「一般国道475号東海環状自動車道（北勢～四日市）埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し、事業を推進してきた。その後も、事業の進捗状況により必要に応じて三者協議を行い、「変更協定書」により工程の細部調整や計画および見直しを行ってきた。また、県は中部建設協会に「作業要領」を提示してきた。

平成13年1月より、省庁再編のために建設省は国土交通省へと再編され、三者協議も国土交通省中部地方整備局・三重県・中部建設協会の間で行われることになった。

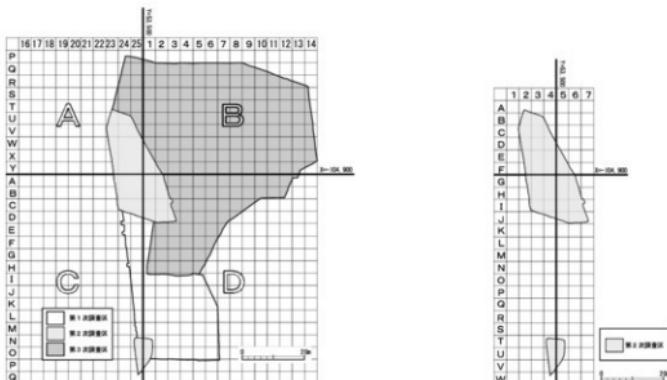
平成18年度以降は、国土交通省より中部建設協会への土工部門の委託が行われなくなり、国土交通省中部地方整備局と三重県による二者協議により、事業が進められている。



第1図 東海環状自動車道 路線上遺跡 (1:50,000) 國土地理院「菰野・桑名・阿下喜・弥富」より

番号	遺跡名	所在地	面積 (m <sup>2</sup> )		現況	概要
			分布	残り		
1	上 憂 作 遺 跡	いなべ市北勢町阿下喜 字上懐作ほか	12,520	0	水田	平成7年度 240m <sup>2</sup> 本調査。範囲確認調査。 平成8年度 4,470m <sup>2</sup> 本調査。範囲確認調査。 平成9年度 5,600m <sup>2</sup> (内下層600m <sup>2</sup> )本調査。 平成11年度 1,470m <sup>2</sup> 本調査。
2	覚正垣内遺跡	いなべ市北勢町阿下喜 字覚正垣内ほか	6,370	0	水田・畠 宅地	平成6年度 範囲確認調査。 平成7年度 1,270m <sup>2</sup> 本調査。範囲確認調査。 平成8年度 1,000m <sup>2</sup> 本調査。範囲確認調査。 平成9年度 400m <sup>2</sup> 本調査。
3	東 村 城 跡	いなべ市北勢町東村 字小山	4,950	0	畠・山林 製材所	平成6年度 2,020m <sup>2</sup> 本調査。範囲確認調査。 平成7年度 1,130m <sup>2</sup> 本調査。 平成9年度 範囲確認調査。
4	権 現 板 遺 跡	いなべ市北勢町東村 字小山	3,980	0	水田・畠 宅地	平成6年度 2,430m <sup>2</sup> 本調査。範囲確認調査。 平成7年度 範囲確認調査。 平成8年度 756m <sup>2</sup> 本調査。
5	宮 山 遺 跡	いなべ市大安町丹生川 久下・片櫛字宮山	29,380	0	山林	平成6年度 範囲確認調査。 平成7年度 12,260m <sup>2</sup> 本調査。範囲確認調査。 平成10年度 範囲確認調査。 平成13年度 860m <sup>2</sup> 本調査。
6	大 久 保 城 跡	いなべ市大安町片櫛 字大久保		0	山林	平成6年度 範囲確認調査。 平成8年度 1,420m <sup>2</sup> 本調査。
7	高 柳 遺 跡	いなべ市大安町高柳	0	0	水田	土取りにより消滅。
8	川 原 遺 跡	員弁郡東員町長深字川原	30,000	0	水田	平成8年度 範囲確認調査。
9	広 山 B 遺 跡	員弁郡東員町長深字広山	5,600	0	山林・畠	平成11年度 範囲確認調査。 平成12年度 930m <sup>2</sup> 本調査。 平成13年度 500m <sup>2</sup> 本調査。範囲確認調査。 平成19年度 2,869m <sup>2</sup> 本調査。
10	広 山 A 遺 跡	員弁郡東員町長深 字広山ほか	21,000	0	山林・畠	平成11年度 範囲確認調査。 平成12年度 1,280m <sup>2</sup> 本調査。
11	筆ヶ崎古墳群	四日市市小牧町字筆ヶ崎	14,000	14,000	山林	径10m前後、高さ1m前後の円墳9基からなる。 川原石が散在し、横穴式石室の可能性が高い。
計	11 遺 跡		127,800	14,000		

第1表 路線上遺跡一覧表



第2図 広山B遺跡共通地区割図 (1:1,600)、広山B遺跡 (第2次) 地区割図 (1:1,600)



第3図 調査区・試掘坑位置図 (1:2,500)

### 3 調査の経過と体制

#### (1) 広山A遺跡

広山A遺跡の現地調査は、東海環状自動車道建設予定地内において平成12年度に実施した。

現地調査に先立って平成2年度に実施された分布調査結果によると、「遺物の散布は少量であるが地形はかなり良好であり、何らかの遺構が残っている可能性が高い」とされている(「東海環状自動車道建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告」三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1990年)。隣接地には飛鳥時代から鎌倉時代にかけての遺構が確認された西山遺跡が所在しており、それとの関係も考慮して範囲確認調査の対象地が選定された。

当該事業以外では、平成13年度に建設予定地東側隣接地で工場拡張に伴う範囲確認調査が実施され、掘立柱建物の存在が確認されている。

平成11年12月6日から同年12月17日にかけて、約18,000m<sup>2</sup>の範囲を対象に範囲確認調査を実施した。調査は幅2mのトレンチと4m×4mの試掘坑を34カ所、4m×2mの試掘坑を2カ所設定して行われた。その結果、トレンチの中央北寄りで、埋土が赤褐色土の柱穴と考えられるピットを検出した。遺構の性格を把握するためにトレンチの一部を拡張したところ、2棟の掘立柱建物が存在することが確認された。その他の試掘坑では、遺構は確認されなかった。また、遺物は少量の土師器小片が出土したにとどまった。

以上の結果から、範囲確認調査を実施した範囲のうち、遺構が確認された範囲を中心とした1,250m<sup>2</sup>について本調査が必要であると判断された。

本調査は平成12年6月7日から10月12日にかけて、1,250m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査の結果、飛鳥・奈良時代と考えられる掘立柱建物4棟、土坑3基、時期不明の水溜1基の他、埋設土器、地割溝を検出した。出土遺物が整理箱4箱分とごくわずかであるため、遺構の時期判断に苦慮したが、掘立柱建物はその規模や方向性など西山遺跡や新野遺跡で検出された建物との比較検討を行い、時期判断を行った。

調査終了後の10月1日に現地説明会を開催し、地元の方を中心に約30名の参加を得た。

なお、最終的な発掘調査面積は1,280m<sup>2</sup>であった。

### 調査日誌（抄）

平成12年

6月7日 重機による表土除去開始。

6月9日 地区杭設定。

6月10日 道具搬入。

6月15日 現場作業開始。北側から人力による  
造構検出開始。溝3条確認。

6月20日 S B 5・S K 4・S X 16検出。

造構掘削開始。S K 4から被熱した土師  
器片出土。

7月3日 S B 6・S K 10・S K 12検出。S B 6の  
柱掘形掘削開始。S B 5の柱掘形土層断面  
実測。

7月4日 S B 7検出。調査区の東側拡張。東員町  
立三和小学校6年生36名見学。

7月6日 S B 7掘削開始。

7月10日 S B 6・S B 7柱掘形土層断面実測。

7月13日 S K 12土層断面実測。

7月14日 調査区南側を拡張。S E 14検出。

7月16日 調査区南側を再拡張。S E 14掘削開始。

7月18日 S E 14掘削終了。造構掘削終了。

8月21日 造構写真撮影。

8月28日 手書きによる造構実測開始。

10月1日 現地説明会開催。約30名参加。

10月11日 埋め戻し開始。

10月12日 埋め戻し終了。

### （2）広山A遺跡

本遺跡は、平成2年度に行われた計画路線内の分布  
調査において発見された遺跡である。前述の分布調  
査の報告には、「荒地が多いため表面踏査が難しく、  
遺物の採集は困難であるが、地形はかなり良好であり  
造構が残っている可能性が高い。」とある。隣接地に  
は広山A遺跡や西山遺跡等が存在していることから  
発掘調査対象となった。

平成11年度に行なった範囲確認調査において、掘立  
柱建物の一部と思われるピット列を確認している。そ  
の結果を受けて、平成12年7月5日から10月10日の  
期間で、930m<sup>2</sup>を対象として第1次調査が行われた。

その後、第1次調査実施時に未買取地であった500  
m<sup>2</sup>を対象として平成13年9月12日～28日にかけて、  
第2次調査が行われている。このとき、調査区外へ

つながると思われるピット列が確認されたことから、  
平成13年10月22日から24日にかけて範囲確認調査が  
行われた。その結果、さらに東側の2,700m<sup>2</sup>の範囲にお  
いて本調査が必要であると判断された。

平成19年9月27日から12月11日にかけて、第3次  
調査を行い、掘立柱建物5棟・柱列1列・土坑5  
基・井戸1基・カマド1基を確認した。

調査終盤の12月2日に現地説明会を開催し、地元  
の方を中心約120名の参加を得た。

第3次調査の最終的な発掘調査面積は2,869m<sup>2</sup>であ  
った。

第1次から第3次までの調査面積は、合計4,299m<sup>2</sup>  
となった。

### 第1次調査 調査日誌（抄）

平成12年

7月5日 重機による表土掘削開始。

7月6日 地区杭設定。

7月10日 調査区南より造構検出開始。

7月18日 造構掘削開始。

M1グリッドのPit1・2・3の土器出土状況  
写真撮影および出土状況図作成（～22日）。

8月4日 調査区北へ拡張。

8月8日 S B 4柱穴土層断面図作成。

8月9日 S B 4柱穴土層断面写真撮影。

8月10日 北拡張部検出及び造構掘削。

S B 4柱穴掘削。

S B 4柱痕出土状況図作成・写真撮影。

S B 4柱痕埋土焼土の写真撮影。

8月11日 S B 4のG25Pit2図面作成。

S B 4個別造構写真撮影。

8月22日 S B 7柱穴土層断面図作成。

Pit 1石出土状況図作成。

S B 1～6個別造構写真撮影。

8月23日 調査区全景写真撮影（～28日）。

8月29日 3mメッシュ設定。

8月30日 1/20平面実測（～9月18日）。

10月1日 現地説明会。

10月5日 調査区西壁土層断面図作成（～6日）。埋  
め戻し（～10日）。

### 第2次調査 調査日誌（抄）

平成13年

9月12日	調査区設定。 重機による表土掘削開始（～13日）。	1/20実測及びレベル測量、埋め戻し（～28日）。
9月14日	地区杭設定。	第3次調査 調査日誌（抄）
9月17日	北地区遺構検出開始。 南地区東壁面土層断面図作成（～18日）、 遺構掘削開始。	平成19年
9月18日	北地区ピット掘削、東面土層断面図作成。 南地区東壁面土層断面写真撮影。	9月27日 重機による表土掘削開始。
9月19日	北地区東壁面土層断面写真撮影。	10月11日 地区杭設定。
9月26日	北地区遺構掘削完了。 南地区遺構掘削完了、3mメッシュ設定。	10月12日 調査区北より遺構検出開始。
9月27日	北地区全体清掃、調査区全景及び個別遺構 写真撮影。 南地区全体清掃、調査区全景写真撮影、	10月16日 遺構掘削開始。（～11月9日） 10月24日 カマド跡検出。
		11月19日 遺構写真撮影。（～20日） 11月20日 1/20実測開始。（～29日） 11月26日 ラジコンヘリによる空撮。
		12月2日 現地説明会。
		12月4日 埋め戻し開始。（～11日）

#### 4 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下「法」）等にかかる諸通知は、 以下により行っている。	(県教育長通知)
(1) 広山A遺跡	
・法第58条の2第1項 (県教育委員会教育長あて) 平成12年6月2日付教理第139号	第2次調査 ・法第58条の2第1項 (県教育委員会教育長あて)
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知 (員弁警察署長あて) 平成13年3月27日付教生第229-23号	平成13年9月13日付教理第192号 ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知 (員弁警察署長あて)
(2) 広山B遺跡	
第1次調査 ・法第58条の2第1項 (県教育委員会教育長あて) 平成12年6月2日付教理第140号	第3次調査 ・法第99条の第1項 (県教育委員会教育長あて)
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知 (員弁警察署長あて) 平成13年3月27日付教生第229-22号	平成19年9月7日付教理第209号 ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知 (いなべ警察署長あて) 平成19年12月28日付教理第1-15号 (県教育長通知)

#### 5 調査の方法

共通するものとして、以下のように行った。  
各遺構の位置や遺物の出土地点を確定するため、国  
土座標第VI系（旧国土座標）の座標値に基づいて、  
100mを1単位とする正方形の大地区を設定した。さ  
らに大地区の中に東西、南北とも100mを25分割した

4m×4mを1単位とするグリッド（小地区）を設  
定した。各グリッドは北西隅を原点とし、調査区の  
西から東へは1～25の算用数字、北から南へはA～Y  
のアルファベットを付与した。  
発掘調査にあたって、表土除去は重機（バックホ

一）を用いて行い、包含層掘削および各遺構の掘削は人力をもって行った。

遺構の重複関係など検出状況を記録するための遺構略測図（遺構カード）の作成は1/40の縮尺で小地区ごとに行った。

遺構番号は、ピットについては、グリッドごとに通し番号を与えた。土坑や溝など複数のグリッドにまたがることのある他の遺構については、調査区全体で通し番号を与えた。なお、本報告にあたって、既に概報などで報告された遺構番号はすべて改称し、新たに与えた遺構番号を正式のものとする。

個別遺構の実測、遺物出土状況図および土層断面図等については、適宜、1/10ないしは1/20等の縮尺で実測図を作成した。

写真撮影は、検出状況や掘削完了状況などについてはモノクロネガとカラーリバーサルフィルムを用い、35mm、プロニー判（6×7cm、6×9cm）、4×5判を使用した。また作業状況などについては、適宜35mmカラーネガも併用した。

調査区の埋め戻しは調査終了後、重機を用いて速やかに行つた。

出土遺物は、洗浄・接合、遺跡名・出土地点・出土年月日の注記を行った後、出土地点ごとに分類した。さらに実測すべき遺物を選別し、実測を行つた。実測された遺物は実測図との照合ができるよう遺物と図面の両方に「R」を付した登録番号（「R○○○○-○○○」）を与えた。

遺物の写真撮影には、主に6×9cmのモノクロネガを使用した。

調査の概要是、年度ごとに、『一般国道475号東海環状自動車道発掘調査ニュース』No12、『一般国道475号東海環状自動車道発掘調査概報』Ⅶ・Ⅷ（2000・2001）にまとめている。

#### （1）広山A遺跡

調査区の地区割りは、国土座標第VI系に合わせてX=-105,000m、Y=53,500mを起点とし、A・Bの大地区として100mを1単位とする方格に区割りした。さらに大地区の中に東西、南北とも100mを25分割した前述の小地区（4m×4mを1単位とするグリッド。以下同じ。）を設定し、各遺構や遺物の出土地点は、大地区と小地区の組み合わせで表示した。

調査区全体の遺構図および等高線図、標高点図の作成は1/50の縮尺で空中写真測量にて行った。遺跡全体写真についてはヘリコプターにより空中写真撮影を行つた。

#### （2）広山B遺跡

第1次調査では、国土座標第VI系に合わせてX=-104,900、Y=53,500を起点とし、100mを1単位とする方格に大地区を設定した。さらに大地区の中に小地区（4mグリッド）を設定した（第2図左）。

第2次調査では、第1次調査と同じ起点から小地区を設定したが、小地区的名称は第1次調査とは連続しない独立した形で付されている（第2図右）。

第3次調査では、第1次調査と同じ起点から大地区A・B・C・Dを設定した。また、小地区的名称も第1次調査と同じものとした（第2図左）。

本書では、混乱を避けるため、第2次調査の地区名は、第2図左の地区名に変換して記述している。

遺構番号については、これも各調査で種々の方法による番号が付けられていたが、本書においては、改めて通し番号で遺構番号をつけなおした。なお、対照できるように、各調査時の遺構番号も遺構一覧表に記載した。

出土遺物は、実測するものとそうでないものに分け、各遺構別にまとめた状態で遺物整理箱に入れて収蔵している。遺物整理箱には番号を与え、別に一覧表を作成している。

（角正芳浩・山口聰嗣・勝山孝文）

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

広山A遺跡（1）と広山B遺跡（2）は、員弁川と朝明川によって形成された、東西に細長く伸びる段丘上に立地する。この段丘が形成されている丘陵の頭頂部は、北の旧員弁郡と南の旧朝明郡との境界になっている。両遺跡は共に、高位段丘上<sup>1</sup>に立地し、標高は50mほどで、河川沿いの沖積地との標高差は

30~35mほどになる。

広山A遺跡は丘陵の中央部に近い平坦面にあり、広山B遺跡は北側の段丘の縁辺部に位置している。両遺跡は北東方向から入り込む小規模な谷により隔てられている。なお、発掘調査前は両遺跡とも、畠地や山林等として利用されていた。

### 2 歴史的環境

旧石器時代～弥生時代 広山A・B遺跡周辺では、旧石器時代の遺跡は明確には確認されていない。しかし、中野山遺跡<sup>2</sup>（3）出土の石器に、この時代の所産である可能性が指摘されているものがある<sup>3</sup>。

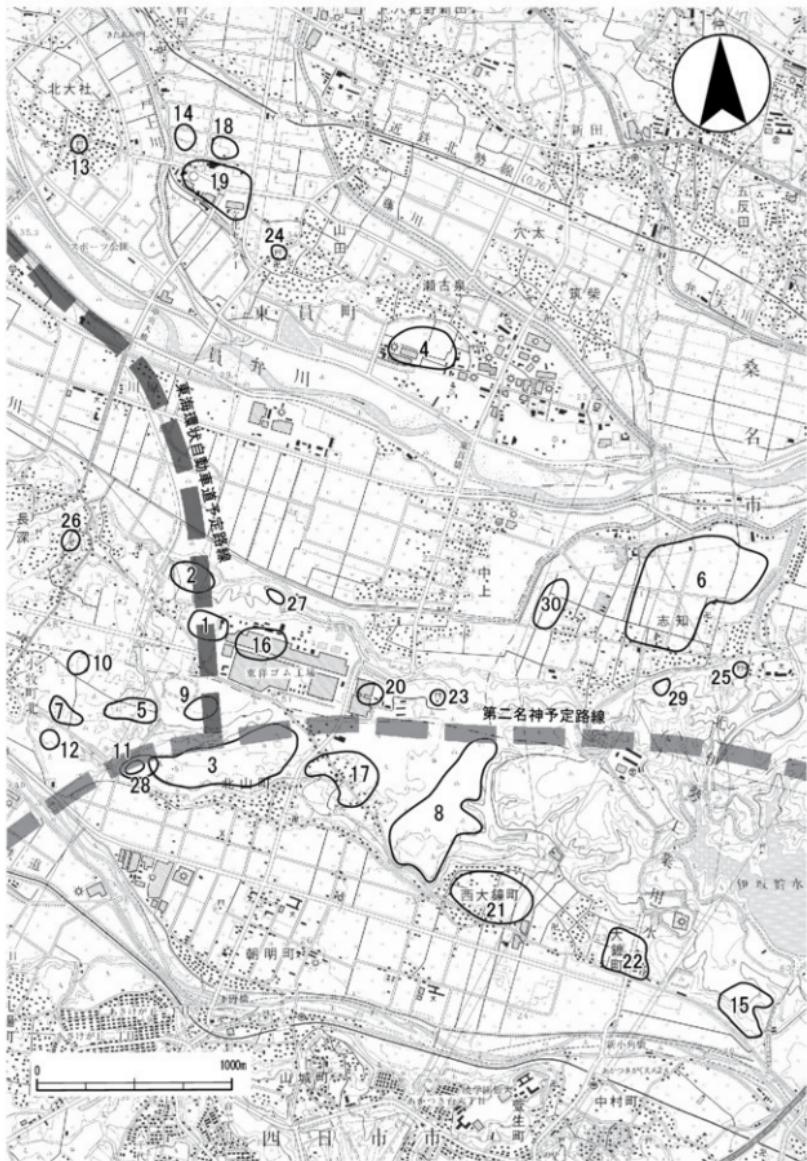
绳文時代では、員弁川左岸の村前遺跡<sup>4</sup>（4）から中期の遺物が出土している。また、右岸の小牧北遺跡<sup>5</sup>（5）や志知南浦遺跡<sup>6</sup>（6）では、晩期の土器棺墓が見つかっている。

弥生時代では、上記の小牧北遺跡で3基の方形周溝墓が確認されているほか、門ノ上遺跡（7）や北山C遺跡（8）でも弥生時代の遺物が出土している<sup>7</sup>。

古墳時代 広山A・B遺跡のある丘陵では、筆ヶ崎古墳群（9）・若宮古墳群（10）・居林古墳群（11）・門ノ上古墳群（12）があり、員弁川を隔てた対岸には、猪名部神社古墳群（13）や西畠古墳（14）がある。朝明川沿いでは、方墳が4基確認されている広古墳群（15）が目を引く。また、集落跡では、西山遺跡（16）・中野山遺跡・北山A・B遺跡（17）・北山C遺跡がある。

古代 古代では、前述の村前遺跡から多数の縁釉陶器が出土しており、さらにはその北西には、西畠遺跡（18）と山田庵寺（19）がある。このほか、同じ員弁川左岸には、延喜式内社候補地の猪名部神社（13）があり<sup>8</sup>、この地の豪族猪名部氏との結びつきを感じさせる。員弁川の右岸では、丘陵上に古墳時代から続く西山遺跡があり、奈良時代までの建物跡や、砥石・鉄製品・フイゴ羽口・鉄滓などの遺物が見つかっている<sup>9</sup>。また、その東隣の新野遺跡（20）からも、

奈良時代から平安時代までの建物跡や、円面硯・砥石・鉄滓などの遺物が確認されている<sup>10</sup>。なお、この丘陵では、朝明郡の小牧北遺跡・北山A・B・C遺跡・西畠遺跡（21）でも鐵滓が見つかっている<sup>11</sup>。承平年間（10世紀前半）の成立とされる『和名類聚抄』には、朝明郡の条に、鍛治に関する集落の存在を連想させる「大金郷」の記載がある<sup>12</sup>。この地域には現在も「大鐘町」や「西大鐘町」の地名が残っており、西畠遺跡や鐘撞遺跡（22）が、「大金郷」の中心ではないかと見られているが<sup>13</sup>。鉄滓の出土した遺跡の広がりを考えると、鍛冶関連の集落は、丘陵の朝明郡側だけでなく、員弁郡側にも存在していたことが想定できる。なお、員弁川の上流には治田鉢山と石博鉢山がある。採掘の記録は文献資料では戦国時代までしか遡れないが<sup>14</sup>、この地域の鍛治行為を考えいく上では、注意しておく必要があると思われる。員弁郡に関して、この一帯には、猪名部神社のほかに、多奈門神社（23）、鳥取山田神社（24）、鳥取神社・平群神社（25）など、延喜式内社候補地が多く存在しており<sup>15</sup>、古代員弁郡の中心地であったようである。員弁郡は天慶3（940）年に神宮に施入され<sup>16</sup>「神郡」となっていることから、式内社の多いことは、神宮による開発とも関係するのかも知れない。条里地割<sup>17</sup>は、員弁川沿いでは右岸の志知付近で確認できるが、左岸では確認されていない。ただし、左岸でも、穴太の小字名に「志町坪」「西之坪」などがあるので<sup>18</sup>、かつては条里地割が存在していた可能性はある。朝明川沿いで、西大鐘付近で条里地割が確認されている。



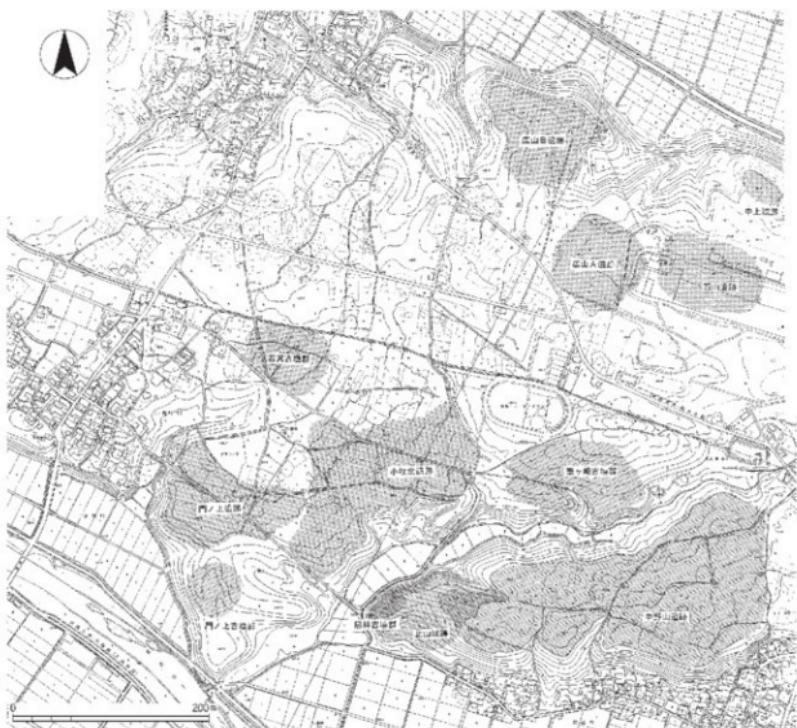
第4図 遺跡位置図 (1:25,000) 國土地理院「滋野」より

**中世**　貞治3（1364）年の式年遷宮に向けてまとめられたとされる『神鳳鈔』<sup>①</sup>の員弁郡の部には、長深御厨や小中上御厨、穴太御厨などの名があり、この地と神宮との関係はこの頃も続いていることが分かる。中世になると、丘陵上に長深城跡（26）・中上城跡（花屏城跡）<sup>②</sup>（27）・北山城跡（28）・志知城跡（29）などの中世城館が築かれている。また、沖積地では、熊田遺跡（30）や志知南浦遺跡などがある。

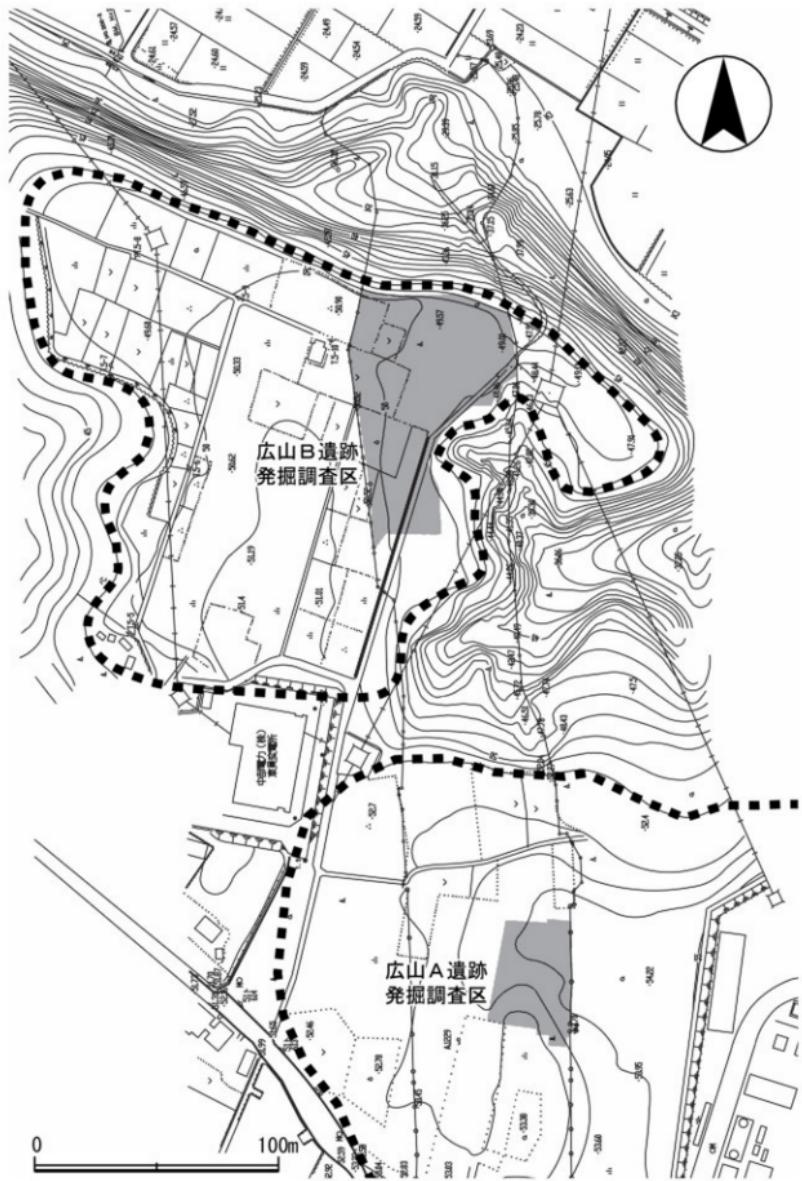
（山口聰嗣・勝山孝文）

【註】

- ① 『地域地質研究報告 桑名地域の地質』（通商産業省工業技術院地質研究所 1991年）による。
- ② 『四日市市史』第三巻（四日市市、1993年）
- ③ 以下、村前遺跡については、『村前遺跡現地説明会』（東員町教育委員会、1992年）による。
- ④ 以下、小牧北遺跡については、『小牧北遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2007年）による。
- ⑤ 以下、志知南浦遺跡については、『志知南浦道路発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2008年）による。
- ⑥ 前掲註②
- ⑦ 『東員町史（下巻）』（東員町史編さん委員会編、1989年）
- ⑧ 『西山遺跡・新野遺跡』（東員町教育委員会、1976年）
- ⑨ 『新野遺跡C地区』（三重県教育委員会、1972年）、および前掲註⑧
- ⑩ 前掲註②
- ⑪ 『諸本集成倭名類聚抄』（京都大学文学部国語学国文学研究室編、1987年）
- ⑫ 前掲註②
- ⑬ 『北勢町史』（北勢町史編さん委員会編、2000年）
- ⑭ 前掲註⑦
- ⑮ 『太神宮諸難事記』『群書類従』第三 神祇部
- ⑯ 以下、条里地割については、『伊勢湾岸地域の古代条里制』（弥永真三・谷岡武雄編、1979年）による。
- ⑰ 『東員町史（上巻）』（東員町史編さん委員会編、1989年）
- ⑱ 『群書類従』第一 神祇部



第5図 遺跡周辺図（1:5,000）



第6図 遺跡地形図 (1:2,000)

### III 広山A遺跡

#### 1 基本層序

遺跡は、丘陵上の平坦面に立地するために土の堆積がほとんどなく、遺構検出面までの深さは20cm前後と浅く、谷に向かう調査区北側でも40cm程度に過ぎない。

ぎなかった。したがって遺物包含層は認められず、表土直下に遺構検出面である明赤褐色粘質土層が存在した。

#### 2 遺構と遺物

検出された主な遺構は、掘立柱建物4棟、土坑6基、埋葬遺構1基、溝4条である。掘立柱建物と土坑は飛鳥時代から平安時代にかけての時期のものと考えられる。また、水溜と溝はすべて近年まで耕作されていた畠地に伴うものである。

出土した遺物は、遺物整理箱に4箱のみと少ない。時代的には、古墳時代と飛鳥・奈良時代及び近世以降に大別される。

なお、記述に関して、掘立柱建物の方位は、東西棟であっても便宜的に、梁行の座標北に対する振れで表記した。「柱間寸法」と「復元規模」は、尺に換算して復元した数値である。「尺」は「30.3cm」で計算している。

##### S B 5 (第8図)

建物遺構 側柱建物

平面規模 4間×3間

柱間寸法 柱) 5.5尺 (1.67m) 等間

梁) 6尺 (1.82m) 等間

復元規模 22尺 (6.67m) ×18尺 (5.45m)

建物方位 N8° E

建物面積 36.35m<sup>2</sup>

S B 15の南東側で検出した東西棟の建物である。柱掘形は径40~50cmの略円形をなす。検出面からの深さは40~70cmであるが、穴底の絶対高はほぼ一定する。柱痕跡は、確認されたもので径約15cmである。

S B 15と重複関係にあるが、柱穴の直接的な切り合いで関係がないため前後関係は不明である。

##### S B 6 (第8図)

建物遺構 側柱建物

平面規模 3間×2間

柱間寸法 柱) 5.5尺 (1.67m) 等間

梁) 6尺 (1.82m) 等間

復元規模 16.5尺 (5.00m) ×12尺 (3.64m)

建物方位 N33° W

建物面積 18.2m<sup>2</sup>

調査区の中央やや南寄りの位置で検出した建物である。柱掘形は平面円形をなし、径65cm前後を測る。検出面からの深さは約60cmである。柱痕跡は確認されたもので径約20cmである。

西隣の柱穴からは、須恵器の杯の小片(14)が出土している。

##### S B 7 (第8図)

建物遺構 側柱建物

平面規模 5間以上×2間

柱間寸法 柱) 6尺 (1.82m) 等間

梁) 8尺 (2.42m) 等間

復元規模 30尺 (9.09m) ×16尺 (4.85m)

建物方位 N23° E

建物面積 44.09m<sup>2</sup>

調査区の南東、S B 6の東方で検出した。桁行3間分、梁行2間を確認した。建物の東部分は調査区外へ延びるが、隣接地で行なわれた東員町による範囲確認調査によって、さらに2間分延長することが確認されており、桁行については、5間以上になる。

柱掘形は平面略円形をなし、径は40~70cmと不揃いである。検出面からの深さは45cm前後を測る。柱痕跡は確認されたもので径約15cmである。

##### S B 15 (第8図)

建物遺構 側柱建物

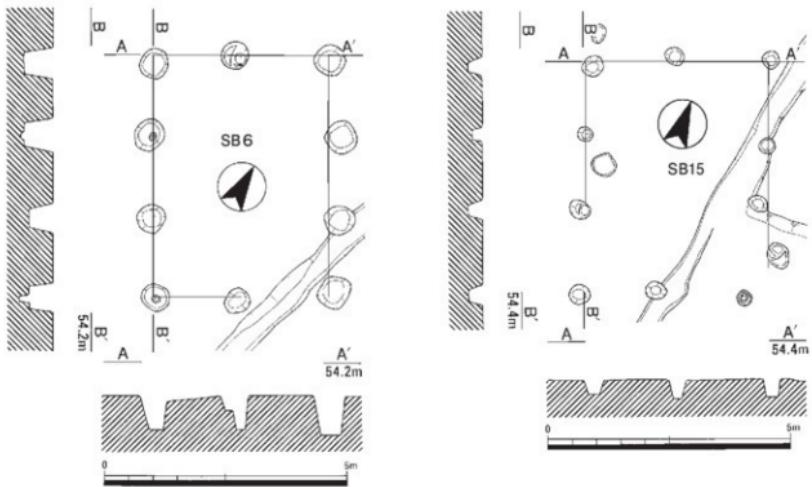
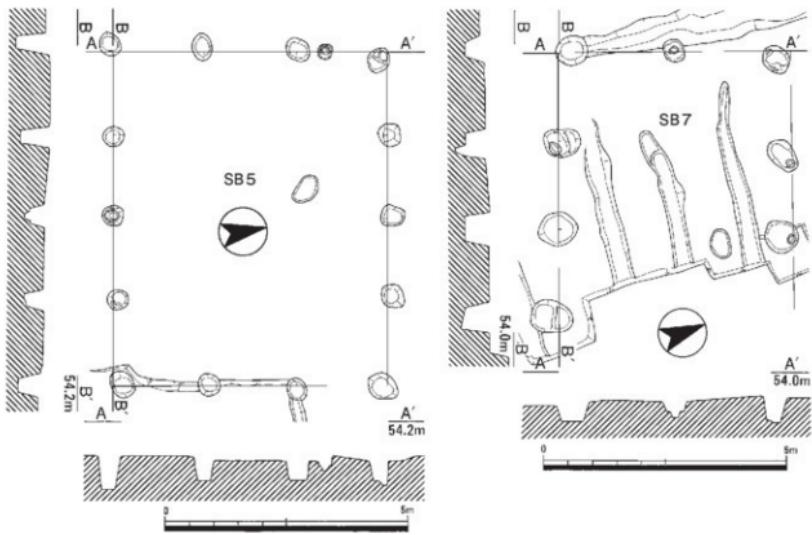
平面規模 3間×2間

柱間寸法 柱) 5尺 (1.52m) +5尺 (1.52m)

+6尺 (1.82m)



第7図 広山A遺跡 遺構平面図 (1:250)



第8図 広山A遺跡 SB5・SB6・SB7・SB15 (1:100)

梁) 6尺 (1.82m) 等間

復元規模 16尺 (4.85m) × 12尺 (3.64m)

建物方位 N21° W

建物面積 17.65m<sup>2</sup>

検出された4棟の掘立柱建物のうち、最も北に位置する建物である。柱掘形は円形で、径約40cmを測る。検出面から30cm程を残す。柱痕跡は確認することができなかった。

他の建物に比べて柱掘形の規模が小さく、柱の並びも悪い。

**S K 4 (第7図)** S B 5 の北側に接する位置で検出した土坑である。平面形は隅丸方形に近く、長軸方向で約2.6m、短軸方向で2.0mの規模を持つ。検出面からの深さは5~10cmと浅く、埋土には大量的焼土と炭化物が含まれる。底面は平坦である。南西隅には長軸方向80cm・短軸方向60cm・深さ約20cmの小土坑を伴う。

古墳時代後期と思われる土師器壺の小片(7)が出土した。

こうした状況から、S K 4 は S B 5 の厨房的な機能を持つ土坑、あるいは竪穴状造構であった可能性も考えられよう。

**S K 10 (第7図)** S B 6 の東側で検出した土坑である。平面形は略方形をなし、一辺約1.1mを測る。検出面からの深さは約10cmと浅い。

埋土中には、焼土と炭化物が大量に含まれており、竪穴住居のカマド跡、あるいは S K 4 のように、S B 6 に付随する厨房施設であった可能性が考えられる。

**S K 12 (第7図)** 調査区南部で検出した平面円形の土坑である。規模は、長軸3.1m・短軸2.4m、検出面からの深さは約30cmを測る。底面は平坦である。

土師器壺(1)と須恵器杯蓋(2~4)の小片が出土した。いずれも古墳時代後期に属する。4の杯蓋は、口径が11.8cmと小さく、口縁部は天井部から垂直に下がるが、天井部との境は明瞭な稜をなさない。口縁端部は丸くおさめられ、頂部は未調整のままである。

**S K 13 (第7図)** 単独で所在する土坑で、55cm×90cmを測り、埋土に焼土が目立つ。

**S K 17・18 (第7図)** どちらも掘立柱建物の内側

で検出された土坑であるが、建物に伴うものであるかどうかは不明である。いずれも埋土に焼土が目立つ。S K 17は60cm×40cm、S K 18は50cm×50cmを測る。

**S X 16 (第9図)** S K 4 の北東側で検出した、土師器の壺(8)が埋設された土坑である。壺形は土器の形に合わせて掘削され、遺構の残存する深さから判断して、埋設された深さはそれほど深くないものと考えられる。

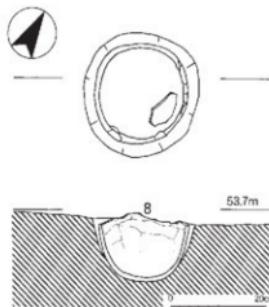
土師器壺は正立状態で埋納されており、土器の上半部は削平により失われている。底部には穿孔が施されている。埋葬遺構と考えられるが、副葬品などはない。

出土した土器は、土師器壺の底部である。底部に焼成後の穿孔が施される。全体に風化が著しく、外側にわずかに縱方向のハケメが認められる。

**S D 2 (第7図)** 調査区の北西部で検出された幅1m前後、残存深が数cm前後の溝である。調査区内外南北に縱断する地割り溝と直交する。

古墳時代後期に属する須恵器杯蓋の小片(5)と共に、近世以降の急須片(9)も出土しており、近年まで耕作されていた畑の地割りに伴う溝と考えられる。

**S D 3 (第7図)** 調査区の北部で検出された東西溝である。西になる程細く浅くなつて消えており、東端は、調査区内南北に縱断する地割り溝と直交する。やはり近年まで耕作されていた畑の地割りに伴う溝と考えられる。



第9図 広山A遺跡 S X 16 (1:10)

近世の所産かと思われる鉄軸を施した鉢皿（15）が出土している。

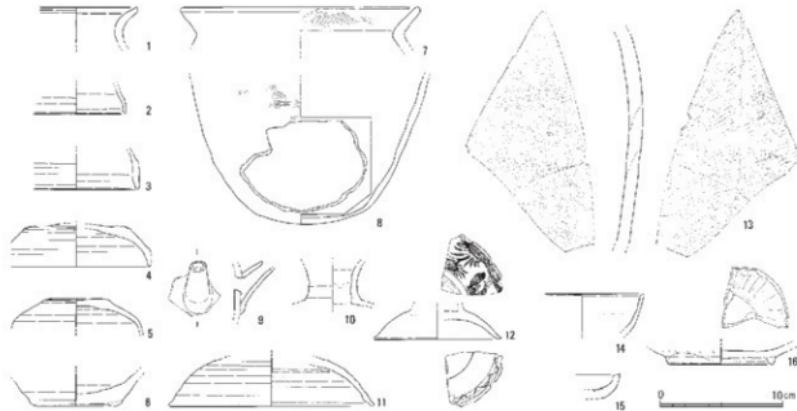
**S D 8 (第7図)** 調査区の南東部で26m程が検出された南北溝である。南部では最大幅1.1m、深さ30cmを残すが、北になる程細く浅くなっている。

須恵器壺の頸部片（10）・大型杯蓋（11）・甕の体部片（13）が出土している。（13）の破断面には、

粘土紐の内斜した継目が明瞭に認められる。近世陶器（12）も出土していることから、溝自体は新しいものと思われる。

**S D 9 (第7図)** 調査区の北西部で検出された、幅30cm、残存深30cmの東西溝である。

中世の無釉陶器椀（山茶椀）の底部片（6）が出土しているが、近世以降の溝と考えられる。（角正芳浩）



第10図 広山A遺跡 出土遺物実測図 (1:4)

番号	実測	出土遺物	出土	出土	法量(cm)	調査・技術的特徴	船上	地底	色調	保存度	特記事項	
1	007-00	上部器	甕	N16	SK12	—	—	器物の外側調整なし。 内側の小穴を含む。	青 灰 白	灰 灰 白	中古 中古 中古	
2	008-06	須恵器	杯蓋	N16	SK12	—	—	コロナデ。	青	灰 白	中古	
3	009-03	須恵器	杯蓋	N15	SK12	—	—	コロナデ。	青 白	灰 白	中古 中古	
4	009-01	須恵器	杯蓋	N16	SK12	11.8 3.5	コロナデ。 足部外縁に斜めの内側不定方向のナメ。	~0.1cmの有鉛無鉛含む。	青 白	外灰 灰 白	中古 中古 中古	
5	009-01	須恵器	杯蓋	G14	SD2	—	ホタルコロナデ。(表面の小不規則調整。)	~0.1cmの有鉛無鉛含む。	青	外灰 白	中古	
6	009-03	山茶椀	碗	G14	SD9	—	6.2	外底全体のコロナデ、底盤の内側、足付高台アーチ。 ホタルコロナデ。	~0.1cmの有鉛無鉛含む。	青 白	外灰 白	中古 中古
7	011-02	上部器	甕	SK4	19.2	—	内底裏面のコロナデ。 内底裏面に斜めの内側不定方向のナメ。	青 白	灰 白	中古 中古	中古 中古	
8	009-02	上部器	甕	R19	SD16	15.0 11.0 残存高10.6	内底裏面に斜めの内側不定方向のナメ。 内底裏面に斜めの内側不定方向のナメ。	~0.1cmの有鉛無鉛含む。	青 白	灰 白	中古 中古	中古 中古
9	012-01	陶器	器蓋	G15	SD2	—	—	—	青	灰 白	中古 中古	中古 中古
10	011-01	須恵器	甕	L19	SD8	—	コロナデ。	青	青 白	中古 中古	—	
11	009-04	須恵器	杯蓋	R19	SD8	16.6	—	コロナデ。	青 白	青 白	中古 中古	中古 中古
12	011-03	陶器	蓋	O19	SD8	—	16.4	コロナデ。	青	灰 白	中古 中古	中古 中古
13	010-01	須恵器	甕	R19	SD8	—	ホタルコロナデ。 ホタルコロナデ。	~0.1cmの有鉛無鉛含む。	青	灰 白	中古 中古	中古 中古
14	008-04	須恵器	杯身	L16	SD6	—	コロナデ。	~0.1cm以下の細かな微調整含む。	青 白	灰 白	中古 中古	SD6 SD2
15	012-02	陶器	甕	F17	SD3	—	ナメ。外底全体のコロナデ、底盤の内側不定方向のナメ。 内底裏面に斜めの内側不定方向のナメ。	青 白	灰 白	中古 中古	中古 中古	
16	007-05	青磁?	碗	F14	SD1	—	8.4	外底全体のコロナデ、底盤の内側不定方向のナメ。 内底裏面に斜めの内側不定方向のナメ。	青	灰 白	中古 中古	中古 中古

第2表 広山A遺跡 出土遺物観察表

## IV 広山B遺跡

### 1 基本層序

発掘調査前の調査区内は、おもに畑地や果林、山林などに利用されていた。昭和40年代の地形図では、桑畠の記号が記されている。また、地元の人の話では、過去に一部削平されたことがあるという。

丘陵上に位置することもあり、複雑な堆積は見られない（第11図）。10~20cmほどの表土や耕作土を取り除くと、その下から地山が見えてくる。各遺構は、この地山を掘り込むかたちで形成されている。地山は粘質土であり、上層部分は土壤化が進んで赤みが

強く、赤褐色を呈し、下層に向かうほど黄色が強くなり明褐色を呈する。遺構の検出は、現地表面から30~50cmほど掘り下げた明褐色粘質土層で行った。このような状況であるため、本書における「包含層出土遺物」とは、表土掘削や遺構検出の過程で遺構上面が削られて出土した遺物がほとんどである。

なお、遺構平面図（第18図）では、方形の区画溝や、等間隔に並ぶ溝などが目を引くが、これらは調査前まで使用されていた畑地の区画溝や耕作溝である。

### 2 遺構と遺物

遺構は調査区全体で、掘立柱建物13棟・柱列3条・土坑5基・井戸1基・カマド1基を検出した。遺構の時期は、出土遺物・遺構の切り合い・建物方位・埋土の状態などをもとに、「古墳時代後期」、「飛鳥時代～奈良時代」、「平安時代」、「近世～近代」の4つの時期に区分した。

遺物はいずれも小片が多く、状態は良くない。出土量は、第1~3次調査まですべて合わせて遺物整理箱で7箱程度であった。遺物の時期はおおむね、「7世紀前半」、「7世紀末～8世紀前半」、「10世紀」の3つの時期に大別できる。遺構の区分に合わせて、それぞれ、「古墳時代後期」、「飛鳥時代～奈良時代」、「平安時代」の項に記述した。7世紀前半より古い時期の遺物は、包含層出土遺物を含めて確認できず、また、10世紀より新しい時期の遺物は、11世紀の百代寺窯式の灰釉陶器碗が1片と18世紀の尾張型焙烙が1片出土しているのみである。

なお、遺構の記述に関して、掘立柱建物の方位は、東西棟であっても便宜的に、梁行の座標北に対する振れで表記した。「柱間寸法」と「復元規模」は、尺に換算して復元した数値である。実測上の数値は遺構一覧表に記載した。「尺」は、「30.3cm」で計算している。

#### (1) 古墳時代後期

##### ① 遺構

この時期の遺構は、土坑1基のみである。

##### S K17（第12図）

規模 18m × 1.2m

深さ 22cm

調査区東壁付近で検出した土坑である。上面を現代の溝が横切り、擾乱されている。第3層より、須恵器杯身（1）・壺（2）、土師器壺の小片が出土している。埋土の状態からみて、第2層と第3層に大きな時期差を感じられなかった。

出土遺物はいずれも7世紀前半のものとみられることから、この時期の遺構とした。

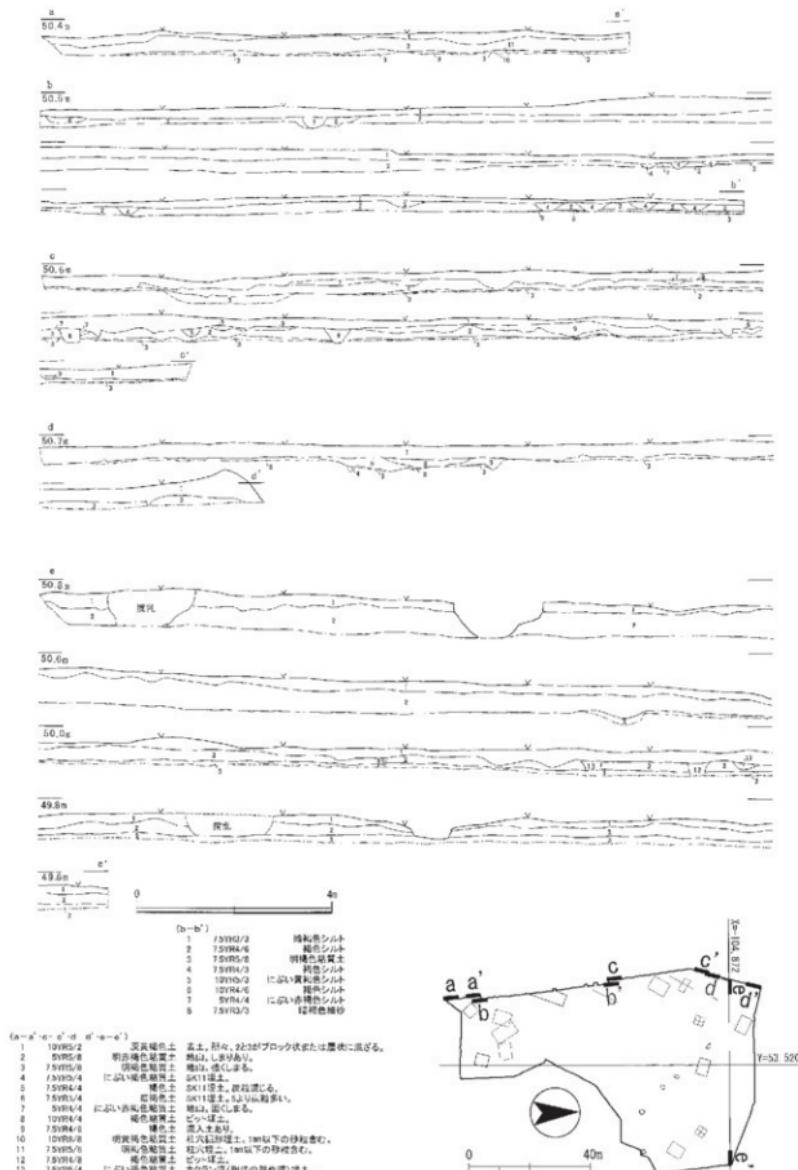
##### ② 遺物

##### S K17出土遺物（第20図1・2）

1は須恵器杯身である。田辺編年<sup>3</sup>のTK209~TK217型式のものとみられる。2は須恵器壺と思われる。底部内面に制作段階で使用された工具痕が残っている。また、底部外面にイネ科植物のものとみられる圧痕が確認できる。1・2ともに、同じ時期のものとみられる。

##### ピット出土遺物（第20図3）

3は須恵器杯身である。口径が20cmを超える大型のもので、底部にはヘラケズリが施されている。この身に合う大きさの蓋（26）がS K 1 1から混入遺物として出土している。口径が20cmを超える大型の杯は、広山B遺跡の近辺では、四日市市の西ヶ谷遺



第11図 広山B遺跡 土層断面図 (1:100)、断面位置図 (1:1,600)

跡<sup>◎</sup>と山奥遺跡<sup>◎</sup>で出土している。

## (2) 飛鳥時代～奈良時代

### ①遺構

この時期の掘立柱建物 1 棟とカマド 1 基を確認した。

### S B 6 (第12図)

建物遺構 個柱建物

平面規模 3間×2間

柱間寸法 柱: 6尺 (1.82m) 等間

梁: 7尺 (2.12m) 等間

復元規模 18尺 (5.45m) × 14尺 (4.24m)

建物方位 N9° W

建物面積 23.11m<sup>2</sup>

溝による搅乱があり、柱穴が 2箇所確認できなかつたが、3間×2間の建物と推定した。調査区内の東西棟で梁行が西に振れるのは、この建物のみである。柱穴 (P2) から宝珠形つまみのつく須恵器杯蓋 (4) が出土している。柱穴の切り合いから S B 2 より古い建物であることが分かる。出土遺物の時期をもとに、建物方位・切り合いなども考慮し、この時期の遺構とした。

### S F 12 (第12図)

形状 煙道付カマド

規模 奥行 2.1m (うち煙道 1.0m) × 幅 0.9m

深さ 12cm

調査区北部で検出した煙道付のカマドである。地上部分は後世の耕作などで、すでに削平されて残つていなかつた。堅穴住居に伴うカマドであると思われるが、住居跡を確認することはできなかつた。壁周溝のようにみえる溝があるが、近・現代の烟の耕作溝の跡である。

カマド内部からは、土師器壺 (5・6)・土師器長胴壺 (7)・須恵器大壺 (8) が出土した。このうち、須恵器の大壺は、破片をカマドの補強材として用いたものが崩落したものと思われる。支柱石がカマド中央部左寄りの位置に、地山に立ったままの状態で残つていた。さらに、別個体の支柱石か補強材とみられる石の破片が、カマド内の右端からみつかっている。

出土した遺物から、この時期の遺構とした。

### ②遺物

### S B 6 出土遺物 (第20図 4)

4 は須恵器杯蓋である。宝珠形のつまみが貼付されている。口縁端部をなでて、わずかであるが、かえしのような形を作っている。天井部外面には中心から半分程度までヘラケズリ調整が行われている。8世紀前半のものと思われる。

### S F 12 出土遺物 (第20図 5～8)

5・6 は土師器壺である。このうち、6 は 7 に大きさや形が似ていることから、長胴壺の可能性がある。7 は土師器長胴壺。口縁部の肥厚・屈曲・体部の丸みなどの度合いから、7世紀末～8世紀初ごろの所産であると思われる<sup>◎</sup>。

8 は須恵器大壺。外面の自然釉が美しい。内面のタキ痕はていねいにナデ消されている。四日市市の菟上遺跡でも同様の調整が施されたものが出土している。菟上遺跡で出土したものと同じく、旅投産と思われる<sup>◎</sup>。

### ピット出土遺物 (第20図 9～12)

9 は須恵器杯。底部がヘラケズリされている。還元焼成できておらず、土師器のような赤い色をしている。10 は土師器鉢。風化が進んでおり、調整は不明。11・12 は土師器壺。焼土に覆われ、重なった状態で出土した。

### (3) 平安時代

#### ①遺構

この時期の遺構として、掘立柱建物を 10 棟、柱列を 3 条、土坑を 1 基確認した。このうち、掘立柱建物と柱列は、どの建物も柱穴の埋土に大きな違いはないが、建物方位が北で 18° (± 3°) 東に振れるグループ (SB3・SB4・SB5・SB20・SB23) と、北で 30° (± 3°) 東に振れるグループ (SB7・SB8・SA9・SA10・SB19・SB21・SB22・SA24) に大別できる。

建物の時期を決定しうる遺物は少ないが、S B 4 と S A 1 0 の柱痕跡から 10世紀の灰釉陶器<sup>◎</sup>が出土していることから、どちらのグループも 10世紀の遺構とした。

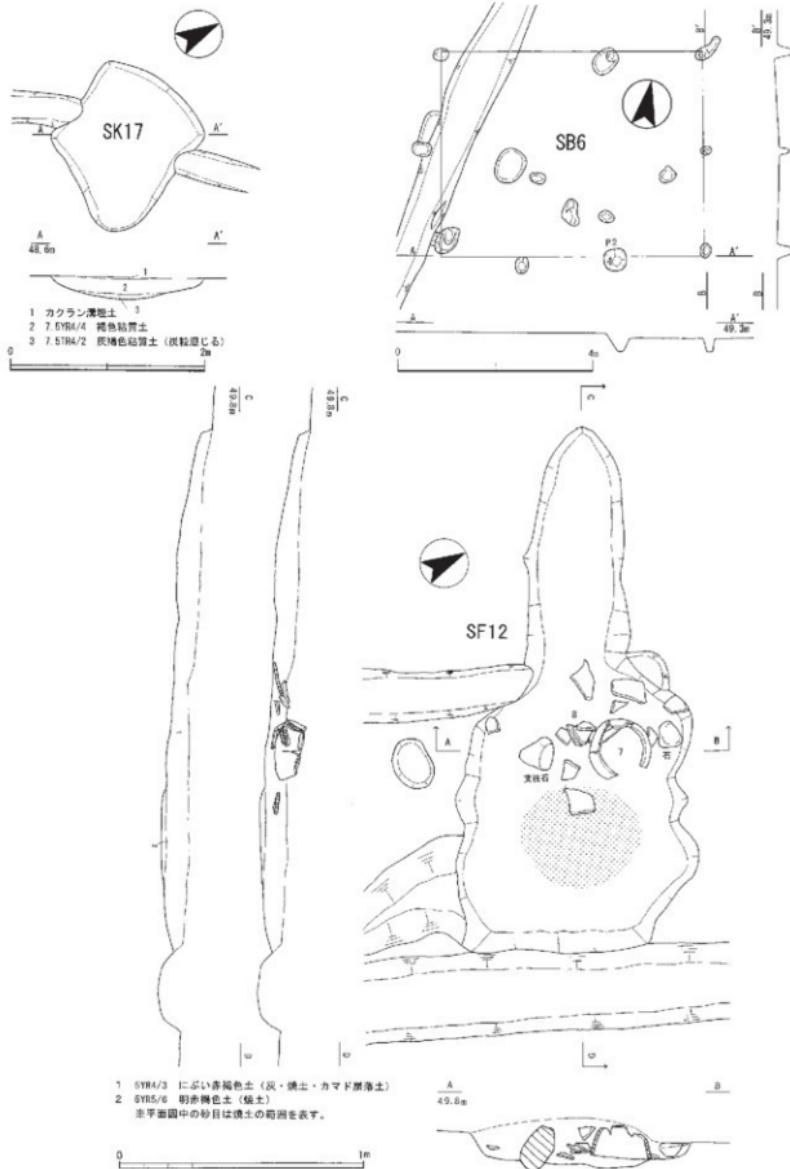
### S B 3 (第13図)

建物遺構 個柱建物

平面規模 3間×2間

柱間寸法 柱: 6尺 (1.82m) 等間

東側: 4尺 (1.21m) + 8尺 (2.42m) +



第12図 広山B遺跡 SK17 (1:50)、SB6 (1:100)、SF12 (1:20)

6尺 (1.82m)  
梁) 7.5尺 (2.27m) 等間  
復元規模 18尺 (5.45m) × 15尺 (4.55m)  
建物方位 N18° E  
建物面積 24.80m<sup>2</sup>

桁行の柱間は、西側は6尺等間だが、東側は北から4・8・6尺とばらつきがある。SB 2と重複するが、柱穴の切り合いはない。建物方位からこの時期の遺構とした。

**S B 4 (第13図)**  
建物遺構 側柱建物  
平面規模 5間以上 × 2間  
柱間寸法 桁) 7尺 (2.12m) +8尺 (2.42m) +  
7尺 (2.12m) +7尺 (2.12m) +  
8尺 (2.42m)  
梁) 7尺 (2.12m) 等間  
復元規模 37尺以上 (11.21m) × 14尺 (4.24m)  
建物方位 N20° E  
建物面積 47.53m<sup>2</sup>以上

建物南側は調査区外のため、桁行はさらに伸びる可能性がある。調査区内では最も大きな建物である。柱穴は径50~60cm。柱痕跡の埋土には多量の炭粒が混入していることから、焼けた、もしくは焼かれた可能性がある。

柱穴より、灰釉陶器椀 (13・14・15・16) と皿 (17) が出土している。このうち、17は柱痕跡からの出土である。遺物はいずれも折戸53~東山72窯式に沿うものであることから、10世紀の遺構とした。

**S B 5 (第13図)**  
建物遺構 側柱建物  
平面規模 3間 × 2間  
柱間寸法 桁) 5尺 (1.52m) +4尺 (1.21m) +  
5尺 (1.52m)  
梁) 6.5尺 (1.97m) 等間  
復元規模 14尺 (4.24m) × 13尺 (3.94m)  
建物方位 N15° E  
建物面積 16.71m<sup>2</sup>

調査区内の3間 × 2間の建物の中では、桁行と梁行の比率が最も正方形に近い建物である。柱穴から土師器と須恵器が出土しているが、細片のため時期決定は難しい。建物方位からこの時期の遺構とした。

**S B 7 (第14図)**  
建物遺構 側柱建物  
平面規模 2間 × 1間  
柱間寸法 桁) 7.5尺 (2.27m) 等間  
梁) 7尺 (2.12m) 等間  
復元規模 15尺 (4.55m) × 7尺 (2.12m)  
建物方位 N30° E  
建物面積 9.65m<sup>2</sup>

南面の中央柱穴が確認できず、規模や形態には疑問を残すが、いちおう建物とした。柱穴から土師器細片が出土している。建物方位からこの時期の遺構とした。しかし、SA 10とは重複するため、若干の時期差はあるものと思われる。

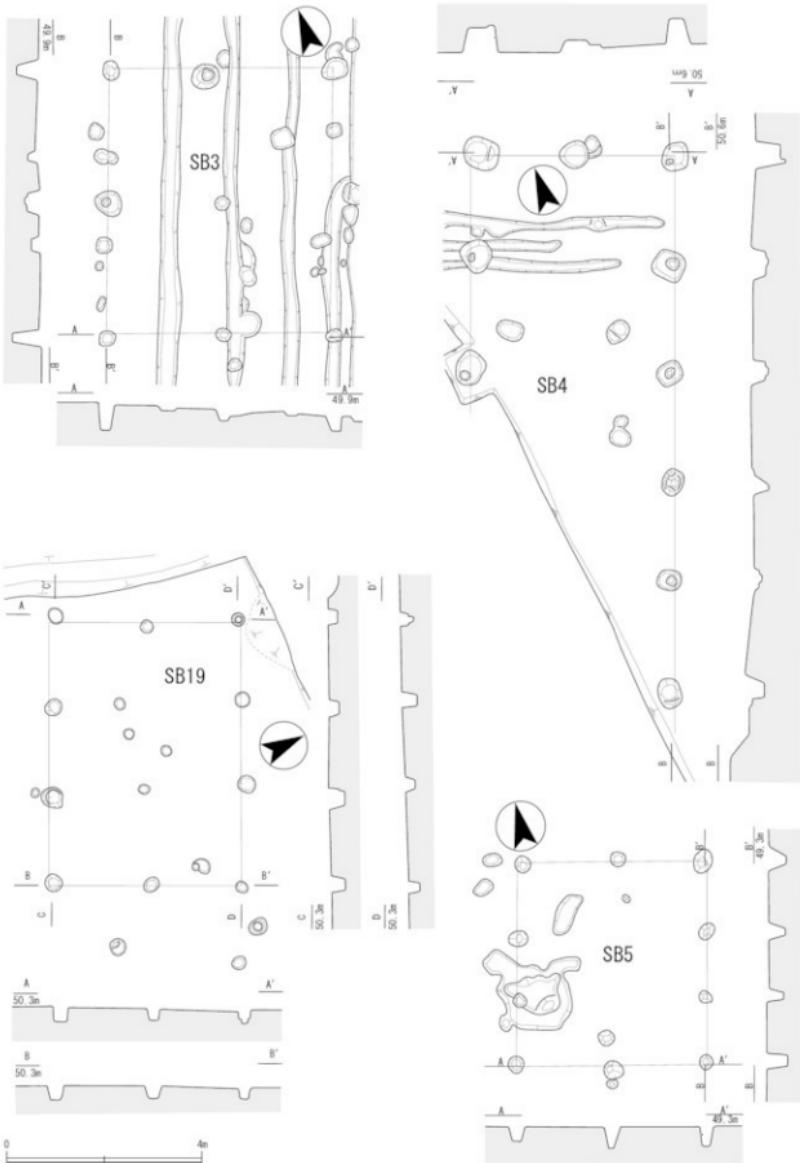
**S B 8 (第14図)**  
建物遺構 側柱建物  
平面規模 3間 × 2間  
柱間寸法 桁) 6尺 (1.82m) +7尺 (2.12m) +  
7尺 (2.12m)  
梁) 8尺 (2.42m) 等間  
復元規模 20尺 (6.06m) × 16尺 (4.85m)  
建物方位 N29° E  
建物面積 29.39m<sup>2</sup>

梁行の柱間は推定により遺存しないが、8尺等間の2間と推定した。西に8尺 (2.42m) 離れて SA 10が平行に並んでおり、また、SA 9とも平行することから、同じ時期の遺構とした。

**S B 19 (第13図)**  
建物遺構 側柱建物  
平面規模 3間 × 2間  
柱間寸法 桁) 6尺 (1.82m) 等間  
梁) 6.5尺 (1.95m) 等間  
復元規模 18尺 (5.45m) × 13尺 (3.94m)  
建物方位 N27° E  
建物面積 21.47m<sup>2</sup>

調査区の最北端で検出した。建物内部に柱穴が4つあり、そのうちのいくつかは、床を支える柱かもしれない。建物方位からこの時期の遺構とした。

**S B 20 (第15図)**  
建物遺構 総柱建物  
平面規模 2間 × 2間  
柱間寸法 桁) 5尺 (1.52m) 等間



第13図 広山B遺跡 SK3・SB4・SB5・SB19 (1:100)

梁) 5尺 (1.52m) 等間  
復元規模 10尺 (3.03m) × 10尺 (3.03m)  
建物方位 N20° E  
建物面積 9.18mf  
調査区北部で確認した。柱穴は径約40cm、建物規模は小さいが、比較的太い柱を使っている。総柱であることや、平面形が正方形を呈することなども合わせて考えると、高床倉庫の可能性が高い。

建物方位からこの時期の遺構とした。

**S B21 (第15図)**  
建物遺構 側柱建物  
平面規模 2間×2間  
柱間寸法 柱) 8尺 (2.42m) 等間  
梁) 7尺 (2.12m) 等間  
復元規模 16尺 (4.85m) × 14尺 (4.24m)  
建物方位 N31° E  
建物面積 20.56mf

調査区内では最も東にある建物である。調査区内の2間×2間の建物の中では最も面積が大きい。建物中央部の柱穴は、若干ずれるが、床を支えるものかも知れない。

建物方位からこの時期の遺構とした。

**S B22 (第15図)**  
建物遺構 総柱建物  
平面規模 2間×2間  
柱間寸法 柱) 5尺 (1.52m) 等間  
梁) 5尺 (1.52m) 等間  
復元規模 10尺 (3.03m) × 10尺 (3.03m)  
建物方位 N32° E  
建物面積 9.18mf

S B20と同じ寸法の建物であり、高床倉庫の可能性が高い。S B21とは建物方位がほぼ同じであり、S B21に付随する倉であると思われる。

**S B23 (第15図)**  
建物遺構 側柱建物  
平面規模 3間×2間  
柱間寸法 柱) 6尺 (1.82m) 等間  
梁) 6尺 (1.82m) 等間  
復元規模 18尺 (5.45m) × 12尺 (3.64m)  
建物方位 N18° E  
建物面積 19.44mf

調査区の北部では、このS B23とS B20の2棟だけがN18° Eのグループに入る。

**S A 9 (第16図)**  
柱列間数 3間  
柱間寸法 11尺 (3.33m) + 11尺 (3.33m) +  
8尺 (2.42m)  
復元規模 30尺 (9.09m)  
柱列方位 N28° E

柱間は北の2間が11尺、その南は8尺であり、描っていない。S A 10と平行するが、間隔は54尺 (16.36m) となっている。柱穴からは、S B 4と同時期の灰釉陶器碗の縞片が出土している。

**S A 10 (第14図)**  
柱列間数 5間以上  
柱間寸法 6尺 (1.82m) + 7尺 (2.12m) +  
6尺 (1.82m) + 7尺 (2.12m) +  
7尺 (2.12m)  
復元規模 33尺 (10.00m) 以上  
柱列方位 N29° E

S B 7と重複する形で検出した柱列である。5間分の柱穴を確認した。S A 9・S B 8と平行するが、間隔はそれぞれ54尺 (16.36m)・8尺 (2.42m) となっている。柱痕跡から折戸53窓式の灰釉陶器碗(19)が出土している。

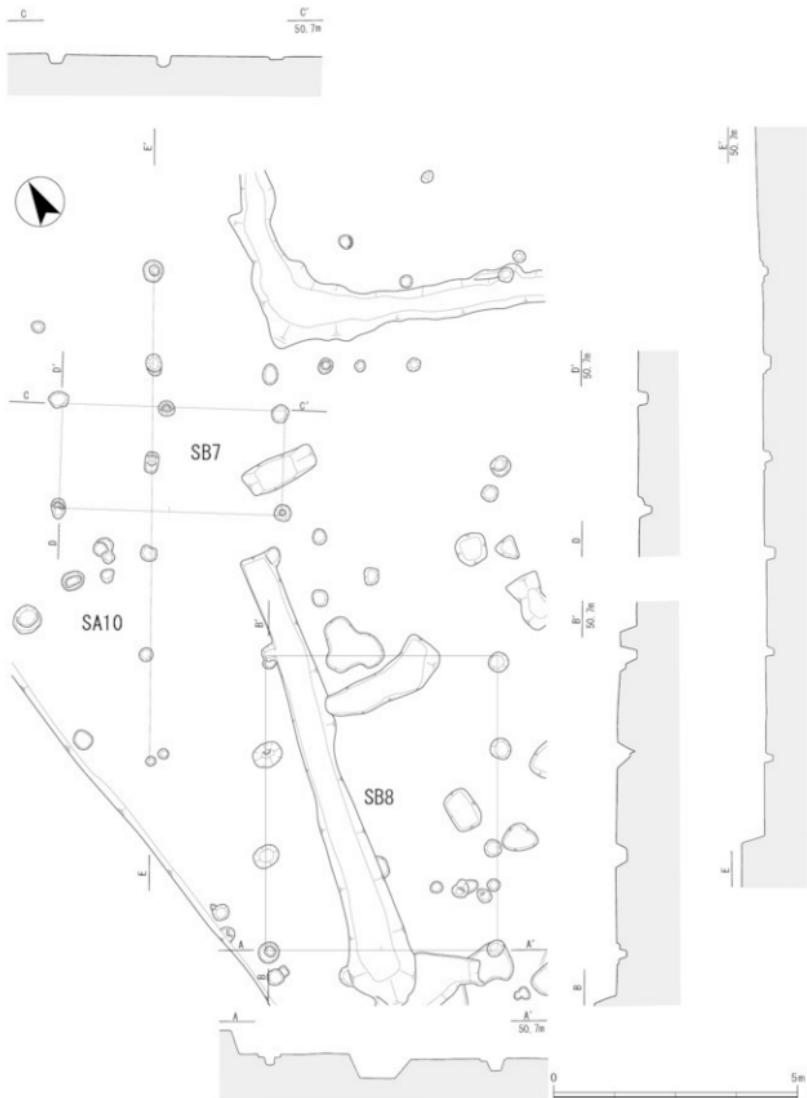
**S A 24 (第16図)**  
柱列間数 3間  
柱間寸法 6尺 (1.82m) 等間  
復元規模 18尺 (5.45m)  
柱列方位 N32° E

遺物は出土していないが、柱列方位からこの時期の遺構とした。

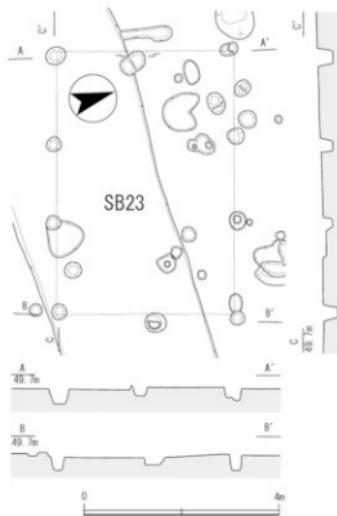
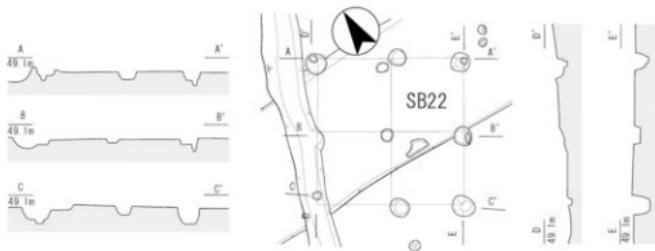
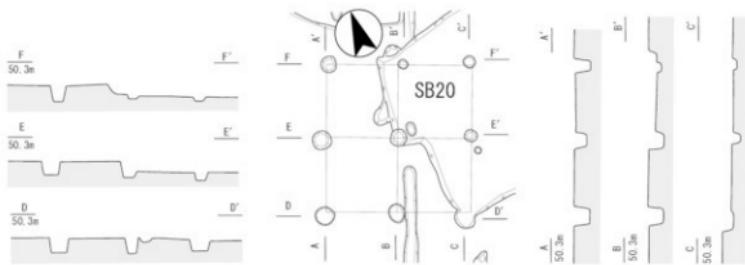
**S K 11 (第16図)**  
規模 3.5m以上×0.7m以上  
深さ 28cm

調査区北部の西壁沿いで検出された。西側は調査区外のため全体の規模は不明。埋土の状態からは第3層と第4層に時期差を感じられなかった。

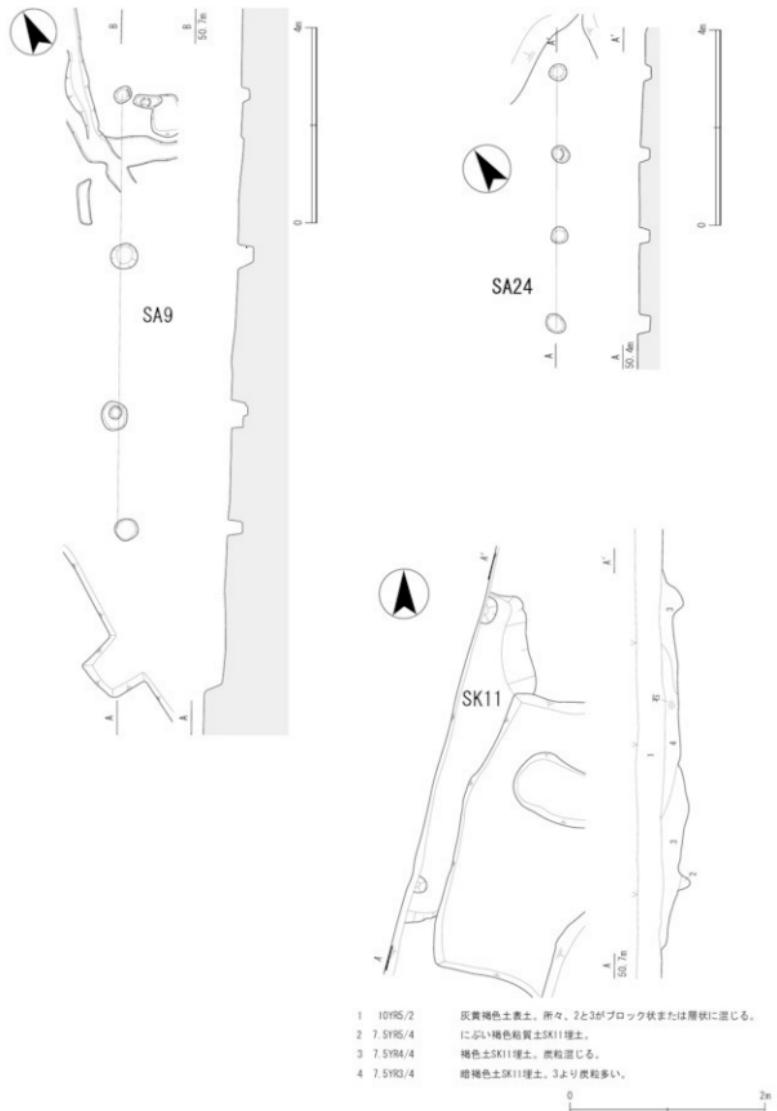
第3層からは、7世紀の須恵器(24・25・27)と10世紀の灰釉陶器(20)が出土し、第4層からも7世紀の須恵器(26)と10世紀の灰釉陶器(21)・綠釉陶器(22・23)が重なった状態で出土している。



第14図 広山B遺跡 SB7・SB8・SA10 (1:100)



第15図 広山B遺跡 SB20・SB21・SB22・SB23 (1:100)



第16図 広山B遺跡 SA9・SA24 (1:100)、SK11 (1:50)

須恵器については混入したものと考えられる。

#### ②遺物

##### S B 4 出土遺物（第20図13～17）

13～16は灰釉陶器碗。灰釉はいずれも漬け掛けであり、口縁端部が若干外反するものとそうでないものとがある。いずれも、10世紀の折戸53～東山72窯式に相当するものである。17は柱痕跡から出土した灰釉陶器皿。灰釉は漬け掛けであり、口縁端部は丸く、外反しない。底部は厚く、糸切り痕も未調整である。10世紀後半の東山72窯式に相当するものである。

##### S B 8 出土遺物（第20図18）

18は砂岩の磨石か根石と思われる。被熱し赤変している。

##### S A 10 出土遺物（第20図19）

19は灰釉陶器碗。柱痕跡からの出土である。漬け掛けで、口縁端部が外反する。10世紀前半の折戸53窯式に相当するものである。

##### S K 11 出土遺物（第20図20～27）

20・21はいずれも漬け掛けの灰釉陶器である。20は皿と思われる。口縁端部が丸く、外反しない。東山72窯式のものである。21は椀か皿。外面体部下半にケズリ調整がみられる。折戸53窯式の第1型式に相当するものである。

22・23は緑釉陶器である。22は後椀。内面の稜は浅い沈線状をなして屈曲し、外面体部にはヘラケズリが施されている。高台は剥がれているが、貼付高台である。23は椀か皿。底部内外面に三叉トチンの痕跡がある。外に広がる角高台を有する。22・23とともに10世紀前半のものとみられる。

24～27は混入していた須恵器類である。いずれも7世紀前半のものと考えられる。24の杯蓋と25の杯身はサイズからみて対になると思われる。26は大型の杯蓋。外面上部にはヘラケズリが施されている。これに合う大きさの身（3）が20mほど離れた小穴から出土している。27は高杯の脚部。2条の沈線が2箇所に入り、3方向に2段のスカシが入っている。

##### ピット出土遺物（第20図28～39）

28～34は灰釉陶器碗皿類である。高台が高いもの（28・30）は深椀か椀Bに分類されるものである。いずれも折戸53～東山72窯式に相当するものである。

35は灰釉陶器碗であると思われる。器壁が全体に厚く、口縁端部に輪花が施されている。釉がほとんどみとめられない。百代寺窯式に相当するものとみられ、調査区内出土の古代の遺物としては最も新しい。なお、百代寺窯式のものは調査区全体でこの1片しか出土していない。

36・37はロクロ土師器。どちらも底部に糸切り痕が残る。37は器壁が薄く、口縁端部が外反する。10世紀後半のものと思われる。

38・39は緑釉陶器。38は器壁が薄く口縁端部が外反する。39は他の緑釉陶器に比べて赤い胎土が使用されている。

#### （4）近世～近代

##### ①遺構

この時期の遺構として、土坑3基・井戸1基を検出した。これらの遺構は、埋土が似ていることから、それぞれの時期は近いものと思われる。土坑は、内面に三和土か漆喰のようなものが貼り付いているものもあり、遺物は出土していないが、おそらく、近世以降の雨水溜か肥溜と考えられる<sup>6)</sup>。

##### S E 14（第17図）

直径 1.4～1.5m

深さ 155m

湧水があるので井戸とした。遺物はなく、底面に少量の炭粒が付着していた。埋土の状況から、使用されなくなった後は、短期間で埋められたものと思われる。SK15・SK16と同じ埋土であることから、近い時期のものと思われる。

##### S K 15（第17図）

直径 1.1～1.2m

深さ 75cm

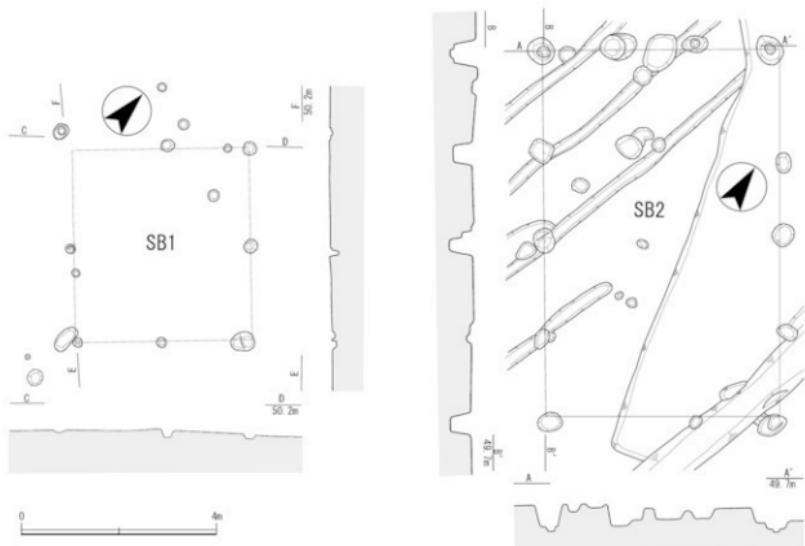
底面の半分ほどに10cmほどの厚さで漆喰が残存していた。壁面の漆喰もわずかだが残っていた。埋土の様子から、使用されなくなった後は、短期間で埋められたようである。切り合のあるSK16より新しい。

##### S K 16（第17図）

直径 0.9～1.0m

深さ 108m

切り合をみるとSK15より古い遺構であるが、埋土がほとんど同じであり、時期は近いものと思わ



第17図 広山B遺跡 SE14・SK15・SK16 (1:50)、SB1・SB2 (1:100)



第18図 広山B遺構 平面図 (1:300)

れる。しかし、漆喰などの痕跡はみられず、遺物も出土していない。

掘削途中で放棄された井戸か、小規模な雨水溜と思われる。

#### S K 18 (第18図)

直径 1.8m

深さ 60cm

底面と壁面の所々に2cmほどの厚さで漆喰が残っていた。埋土の様子から、使用されなくなった後は、短期間で埋められたようである。

#### (5) その他

##### ①時期不明の遺構

以下の2棟は建物方位と位置関係から、対になる建物であると思われる。柱穴埋土は10世紀のものとした建物群と、ほとんど差異はない。しかし、建物方位はいずれの時期の建物とも大きく異なる。柱穴より出土した遺物は細片で、時期決定は難しい。ただし、10世紀の建物群にみられるN18° Eを中心とする方位は、現代まで畑の地割りにも受け継がれていることを考えると、8世紀前半～10世紀の建物であると思われる。

#### S B 1 (第17図)

建物遺構 側柱建物

平面規模 2間×2間

柱間寸法 柱) 6.5尺 (1.97) 等間

梁) 6尺 (1.82m) 等間

復元規模 13尺 (3.94m) × 12尺 (3.64m)

建物方位 N38° W

建物面積 14.34m<sup>2</sup>

建物方位と位置関係からS B 2とは対になる建物と考えられる。柱穴より土師器細片が出土しているが、時期を決定できるものではない。

#### S B 2 (第17図)

建物遺構 側柱建物

平面規模 4間×3間

柱間寸法 柱) 7尺 (2.12m) +6尺 (1.82m) +

6尺 (1.82m) +6尺 (1.82m)

梁) 6尺 (1.82m) +5尺 (1.52m) +

5尺 (1.52m)

復元規模 25尺 (7.58m) × 16尺 (4.85m)

建物方位 N35° W

建物面積 36.76m<sup>2</sup>

S B 1とは対をなす建物と考えられる。南東隅の柱穴はS B 6の柱穴と切り合いがあり、S B 6より新しい建物であることが分かる。桁行4間×梁行3間の建物は調査区内では、この1棟だけであり、建物方位も大きく異なることから、他の建物とは時期が異なるものと思われる。

##### ②包含層出土遺物 (第20図40～52)

40・41は縦軸陶器。41の高台は二等辺三角形を呈する。いずれも10世紀のものと思われる。

42は鉄鉢形の須恵器。43は須恵器杯。どちらも8世紀前半のものとみられる。

44～47は灰釉陶器。椀皿類の灰釉はいずれも溶け掛けである。45の口縁は挽きが弱く端部は丸い。東山27窓式のものである。46は口縁端部に弱い外反がみられるが、底部の糸切り痕は未調整で、体部下半のヘラケズリもみられない。折戸53窓式の第2型式に相当するものである。47は瓶の底部とみられる。

48は土師器培壩。18世紀の尾張型のものである。

49は砂岩製の磨石と思われる。

50～52は鉄製品類。50は刀子。木質片の付着が見られることから、鞘に入った状態で遺棄されたものと思われる。51は鉄滓。肉眼観察では、鎌の茎部分のようにも見られるが、一部に滓化した部分も見られる。性状を調べるため、自然科学分析を行った結果、鍛錬鍛冶滓と推定された(附編を参照)。

なお、上記2点は調査区北端の耕作溝(搅乱溝)からの出土ではあるが、周辺には多数の柱穴が存在しており、それらの柱穴からは、7～10世紀の遺物が出土している。また、隣接するグリッドを含めて、周辺部の包含層からも10世紀より新しい遺物は1点も見つかっていない。これらの状況から、10世紀以前の遺物が、現代の耕作溝に混入したものと思われる。

52は平角釘。調査区南側の西壁近辺より出土した。こちらも現代の耕作溝から見つかったが、混入と考えた。

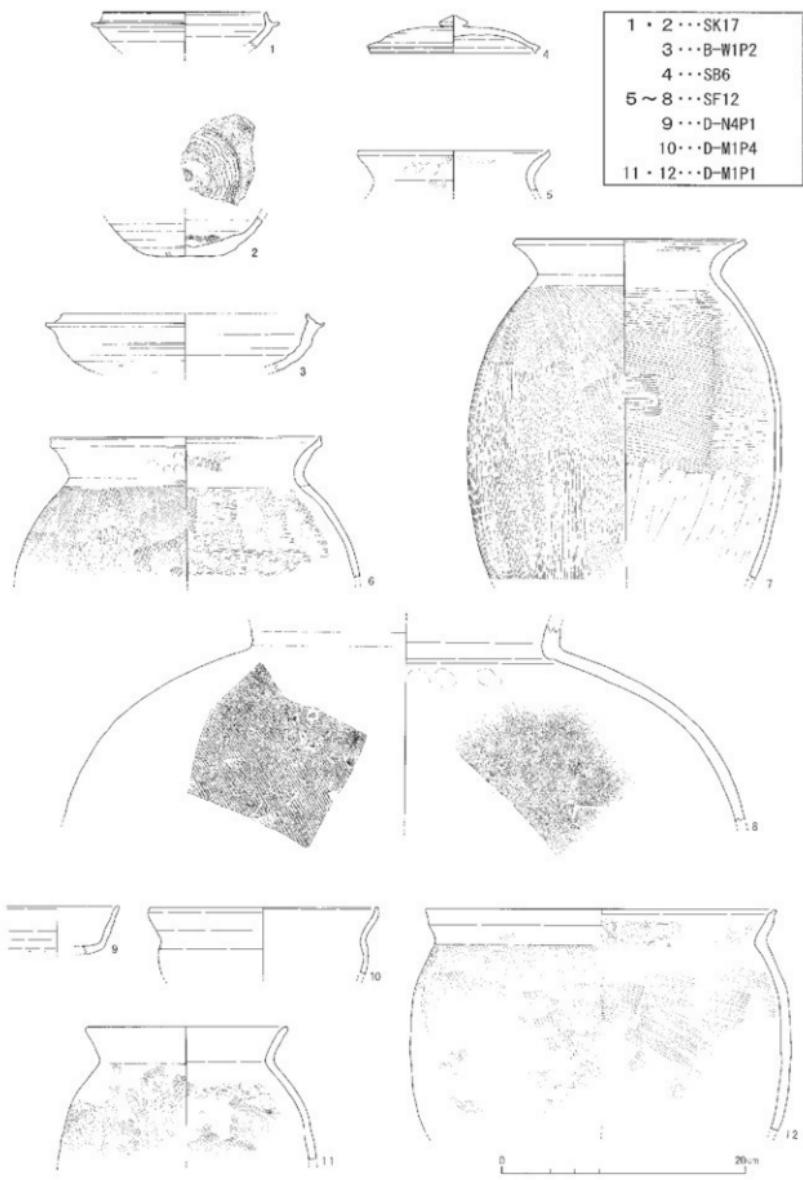
(山口聰嗣・今尾宏記・勝山孝文)

[註]

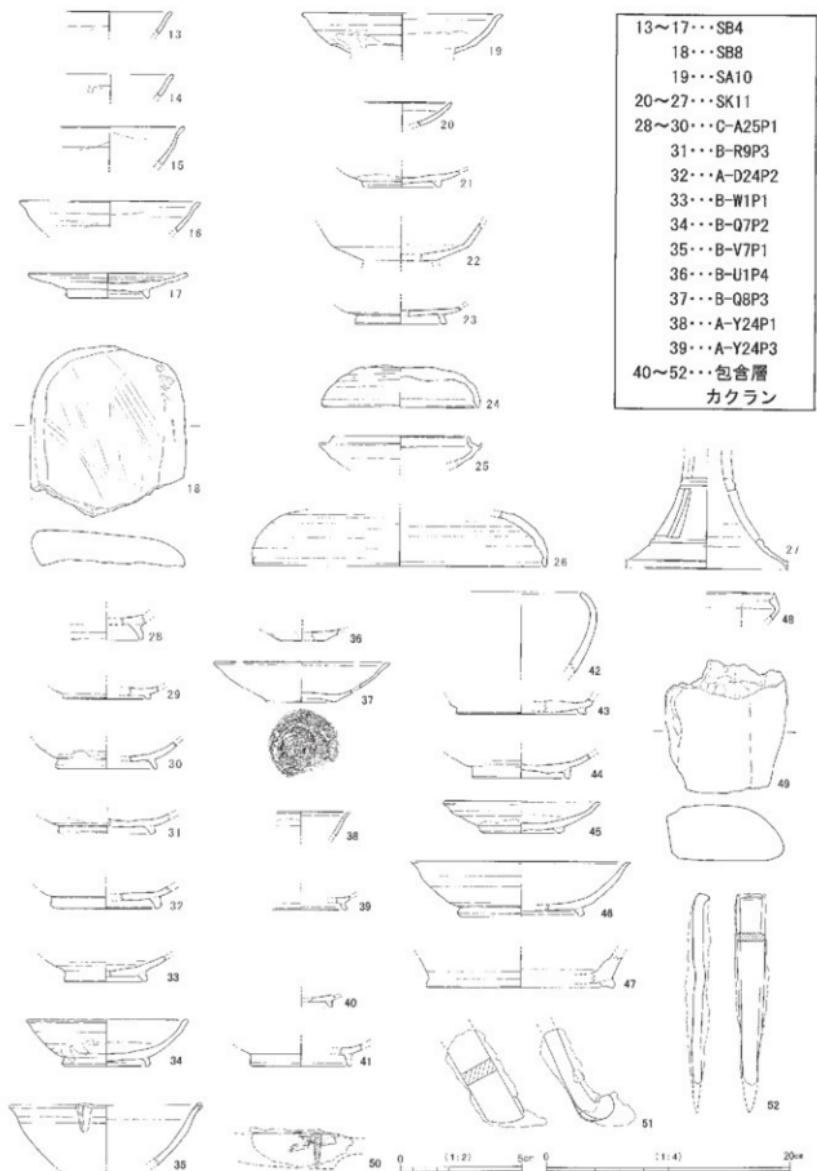
- ① 以下、須恵器は主に、田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1981年)を参照した。
- ② 『西ヶ谷遺跡3』(四日市市教育委員会、2002年)の59番の遺物。
- ③ 『山奥遺跡II』(四日市市教育委員会、2001年)1923番の遺物。
- ④ 『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』(古代の土器研究会編、1997年)
- ⑤ 『菟上遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2005年)の2172番や2550番の遺物。
- ⑥ 灰釉陶器・綠釉陶器は主に、『概説 中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会編、1995年)を参照した。
- ⑦ 『古代の一般集落における倉の持つ傾向』『北堀池遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会、1992年)による。
- ⑧ 雨水溜または肥溜については、瀬辺一機氏に実見していただき、指導を受けた。



第19図 広山B遺跡 調査区内地形図 (1:600)



第20図 広山B遺跡 出土遺物実測図① (1:4)



第21図 広山B遺跡 出土遺物実測図② (1:4) \*50~52のみ (1:2)

遺構番号	調査次数	大地区	小地区	掘立柱建物・柱列				土坑・井戸・カマドなど			時期	備考	
				間数 (桁×梁)	桁行(m)	梁行(m)	建物面積 (m <sup>2</sup> )	建物方向	長軸(m)	短軸(m)	深さ(n)		
SB 1	1-2	C-D	N1, 025, 01, 02	2×2	3.9	3.6	14.04	N38° W	-	-	-	時期不明	側柱建物
SB 2	1	D	K2, K3, L2, L3, L4, N3	4×3	7.6	4.8	36.5	N35° W	-	-	-	時期不明	側柱建物
SB 3	1	D	K1, K2, L1, L2, M1, M2	3×2	5.4	4.6	24.8	N18° E	-	-	-	平安	側柱建物
SB 4	1	C-D	G24, G25, H25, I25, J25	5以上×2	11.0	4.1	45.1以上	N20° E	-	-	-	平安	側柱建物
SB 5	1	D	M5, M6, N5, N6	3×2	4.1	3.8	15.58	N15° E	-	-	-	平安	側柱建物
SB 6	1	D	K4, K5, L4, L5	3×2	5.3	4.1	21.73	N9° W	-	-	-	飛鳥 奈良	側柱建物
SB 7	2	A	V23, V24, W24	2×1	4.6	2.1	9.66	N30° E	-	-	-	平安	側柱建物
SB 8	2	A	X23, X24, X25, Y23, Y24	3×2	5.9	4.7	27.7	N29° E	-	-	-	平安	側柱建物
SA 9	1-2	C	C25, D24, D25, E24	3	9.0	-	-	N28° E	-	-	-	平安	
SA 10	2	A	U24, V24, W23, X23	5以上	10.0以上	-	-	N29° E	-	-	-	平安	
SK 11	3	A	R24, S23	-	-	-	-	-	3.5以上	0.7以上	0.28	平安	
SF 12	3	B	T4	-	-	-	-	-	2.1	0.9	0.12	飛鳥 奈良	長軸には煙道1.0m を含む
久番 13	3	B	W9	-	-	-	-	-	-	-	-	風倒木	
SE 14	3	B	X7	-	-	-	-	-	1.5	1.4	1.55	近世 近代	
SK 15	3	B	W6, W7	-	-	-	-	-	1.2	1.1	0.75	近世 近代	漆喰有り
SK 16	3	B	W6	-	-	-	-	-	1.0	0.9	1.08	近世 近代	
SK 17	3	D	A13	-	-	-	-	-	1.8	1.2	0.22	古墳 後期	
SK 18	3	D	A9, A10	-	-	-	-	-	1.8	1.8	0.6	近世 近代	漆喰有り
SB 19	3	B	Q2, Q3, R1, R2, R3	3×2	5.5	3.8	20.90	N27° E	-	-	-	平安	側柱建物
SB 20	3	B	U1, U2	2×2	3.0	3.0	9.0	N20° E	-	-	-	平安	細柱建物
SB 21	3	B	V12, V13, W12, W13, X13	2×2	4.8	4.1	19.68	N31° E	-	-	-	平安	側柱建物
SB 22	3	B	T11, U11	2×2	3.0	3.0	9.0	N32° E	-	-	-	平安	細柱建物
SB 23	3	B	T5, T6, U5, U6	3×2	5.3	3.6	19.08	N18° E	-	-	-	平安	側柱建物
SA 24	3	A	T25	3	5.1	-	-	N32° E	-	-	-	平安	

第3表 広山B遺跡 遺構一覧表

報告番号	実測番号	種類 器皿等	「?」 遺構名	調査 回数	調査時 遺構名	計測値 (cm)	残存度	調整・挂法の特徴	地土	機成	色調	特記事項	
1	3007-01	須恵器 杯身	D-A13 SK17	3次	同	口径13.4 2/12	口縁部 外: 口付?、 内: 口付?	密 (~1mm砂粒含)	良	内外・灰7.5Y6/1	TK209 第2層上層		
2	3007-02	須恵器 壺	D-A13 SK17	3次	同	—	底部 3/12	外: 約5cm(植物圧痕有り)、口付? 内: 口付? (工具痕有り)	密 (~1mm砂粒含)	良	内外・灰7.5Y6/1	第2層上層	
3	2003-01	須恵器 杯身	B-B1 P2壺形	2次	D5 P2壺形	口径20.2 2/12	口縁部 外: 口付?、 内: 口付?	密 (~3mm砂粒含)	良	内外・灰白10Y7/1			
4	1005-05	須恵器 杯壺	B-L5 SB6-P2	1次	LSP2 SB6	口径13.6 2/12	口縁部 外: 貼付宝珠、口付?、 内: 口付?	密 (~2mm砂粒含)	良	外: 灰5/ 内: 褐灰5YR5/1			
5	3005-05	土師器 壺	B-T4 SF12	3次	同	口径15.8 2/12	口縁部 外: 口付?、 内: 口付? (摩耗有)	密 (~3mm砂粒含)	—	内外・にふい黄7.5Y6/4			
6	3002-01	土師器 壺	B-T4 SF12	3次	同	口径22.0 1/12	外: 口付?、 内: 口付?、 外: 32cm、 内: 32cm、 外: 32cm、 内: 32cm (7本/cm)	密 (~5mm砂粒含)	—	内外・暗7.5Y6/6~明褐 7.5YR5/6			
7	3003-01	土師器 長颈壺	B-T4 SF12	3次	同	口径19.1 3/12	口縁部 外: 口付?、 内: 口付?	外: 32cm、 内: 32cm (7本/cm)	密 (~2mm砂粒含)	—	内外・にふい黄10Y7R/4		
8	3006-01	須恵器 大壺	B-T4 SF12	3次	同	腹部径 25.0前後 1/12	頭部 外: 口付?、 内: 口付?	頭部 外: 口付?、 内: 口付?	密 (~2mm砂粒含)	良	柔地: 黄灰2.5Y6/1 輪: 暗7.5Y4/4	内部に横杭行 消し・傾投?	
9	1004-03	須恵器 杯	D-N4 P1	1次	NAP1	—	小片	外: 口付?、 内: 口付?	やや密 (~2mm砂粒含)	不良	内外・暗5Y7/6		
10	1008-02	土師器 鉢	D-M1 P4	1次	MIP4	口径18.8 1/12	口縁部 外: 不明 (摩耗有)	(MO処理)	—	外: 暗7.5YR7/6 内: 暗7.5YR6			
11	1008-05	土師器 壺	D-M1 P1	1次	MIP1	口径16.2 1/12	口縁部 外: 口付?、 内: 口付? (摩耗有)	密 (~2mm砂粒含)	良	外: 明黄褐10Y7R/6 内: にふい黄暗10Y7R/4			
12	1004-01	土師器 壺	D-M1 P1	1次	MIP1	口径28.6 2/12	口縁部 外: 口付?、 内: 口付?	やや密 (~2mm砂粒含)	良	外: 暗7.5YR7/6 内: にふい黄暗10Y7R/4	口縁部欠け		
13	1005-04	灰陶簡便 碗	C-G25 SB4-P3	1次	G25P1 SB4	—	小片	内外: 口付?、施脂 (濁け掛け)	やや密	良	内外: 淡黄暗10Y8R/3	H02	
14	1005-03	灰陶簡便 碗	D-G1 SB4-P1	1次	G1P1 SB4	—	小片	内外: 口付?、 施脂 (濁け掛け)	密	良	内外: 灰白2.5Y7/1	H02	
15	1005-01	灰陶簡便 碗	C-H24 SB4-P4	1次	H24P1 SB4	—	小片	内外: 口付?、 施脂 (濁け掛け)	やや密 (~1mm砂粒含)	良	内外: 灰白2.5Y7/1 輪: 明黄暗2.5Y6/6	053	
16	1005-02	灰陶簡便 碗	D-G1 SB4-P1	1次	G1P1 SB4	口径14.4 2/12	口縁部 外: 口付?、 施脂 (濁け掛け)	やや密 (~3mm砂粒含)	良	内外: 灰白2.5Y8/1~2 輪: 灰4-7.5Y6/2	053		
17	1005-06	灰陶簡便 壺	C-G25 SB4-P2 柱頭	1次	G25P2 SB4	口径12.8 高台径 6-2 5/12	外: 口付?、 貼付高台、 内: 口付?、 施脂 (濁け掛け)	密 (~2mm砂粒含)	良	内外: 灰白5Y7/1 輪: 暗7.5Y5/4	H02		
18	2001-05	石製品 磨石・礫石	A-W24 SB8P1	2次	D3P1 SB1	直径14.1 短径12.8 —	—	擦痕あり	—	—	にふい黄7.5Y6/4	砂岩?、 重量620g	
19	2002-04	灰陶簡便 碗	A-V24 SA10-P1	2次	C3P1 SA3	口径16.4 3/12	口縁部 外: 口付?、 内: 口付?	密	良	内外: 灰2.5Y7/2	053		
20	2005-06	灰陶簡便 壺	A-R24 SK11	3次	同	—	小片	外: 口付?、 施脂 (濁け掛け、自然輪) 内: 口付?、 施脂 (濁け掛け、自然輪)	密 (微砂粒含)	良	内外: にふい黄暗10Y7R/2	H02 第4層上層	
21	2004-06	灰陶簡便 碗	A-R24 SK11	3次	同	高台径 6.0 6/12	外: 口付?、 内: 口付?	密	良	内外: 灰白2.5Y7/1	053 第4層上層		
22	2004-05	灰陶簡便 壺	A-R24 SK11	3次	同	底径6.0 2/12	底部 外: 口付?、 内: 口付?	密	良	柔地: 灰白10Y7/1 輪: 暗7.5Y6/3	K90~053 傾投?		
23	2004-04	灰陶簡便 碗	A-R24 SK11	3次	同	高台径 7.5 5/12	底部 外: 口付?、 内: 口付?	密	良	柔地: 灰白2.5Y8/1 輪: 暗7.5Y6/6	K90~053 傾投?		
24	2001-04	須恵器 杯壺	A-R24 SK11	3次	同	口径12.8 器高3.4 2/12	外: 口付?、 内: 口付?	密 (~2mm砂粒含)	良	内外: 灰7.5Y5/1	TK209 混入		
25	2001-05	須恵器 杯身	A-R24 SK11	3次	同	口径11.2 2/12	口縁部 外: 口付?	密 (~1.5mm砂粒 含)	良	内外: 灰白5Y7/1	TK209 混入		
26	2001-03	須恵器 杯壺	A-R24 SK11	3次	同	口径24.0 4/12	口縁部 外: 口付?、 内: 口付?	密 (~2mm砂粒含)	良	内外: 灰5Y6/1	混入		

第4表 広山B遺跡 出土遺物觀察表①

報告 番号	実測 番号	種類 器物等	「？」 遺構名	調査 次数	調査時 遺構名	計測値 (cm)	残存度	調整・技法の特徴	粘土	焼成	色調	特記事項
27	3001-06	須惠器 高杯形部	A-B24 SK11	3次	同	底径12.5 3/12	底部 内: 叩打子、歯少、凹縁2条、刃少、凹 縁2条、刃少 内: 叩打子、2段目	密 (~1mm砂粒含)	良	内外: 灰白2.5YB/0	混入	
28	2002-06	灰釉陶器 椀	C-A25 P1	2次	G4P1	—	小片	外: 貼付高台後打子 内: 叩打子・施難	密	良	内外: 灰白2.5YB/2	H72 重ね焼き痕
29	2002-02	灰釉陶器 椀	C-A25 P1	2次	G4P1	高台径 6.6 1/12	底部 内: 叩打子	外: 叩打子、貼付高台後打子、刃少 内: 叩打子	密	やや 良	内外: 淡黄2.5YB/3	
30	2002-05	灰釉陶器 椀	C-A25 P1	2次	G4P1	高台径 8.0 3/12	底部 内: 叩打子・施難	外: 叩打子、貼付高台後打子、系切り 内: 叩打子・施難	密 (~2mm砂粒含)	良	内外: 灰白2.5Y/1	053 重ね焼き痕
31	3005-10	灰釉陶器 椀	B-R9 P3	3次	同	高台径 8.0 3/12	底部 内: 叩打子・施難	外: 叩打子、貼付高台後打子、系切り 内: 叩打子・施難	密 (微粉粒含)	良	内外: 灰白5YB/1	H72 高台に植物压痕
32	1007-02	灰釉陶器 椀	A-B24 P2磁形	1次	D4 P2振形	高台径 8.2 2/12	底部 内: 叩打子・施難	外: 叩打子、貼付高台後打子、系切り 内: 叩打子・施難	密	良	内外: 灰白5Y/1	H72
33	2001-04	灰釉陶器 椀	B-W1 P1	2次	D5P1	高台径 6.2 2/12	底部 内: 叩打子・施難	外: 叩打子、貼付高台後打子、系切り 内: 叩打子・施難	密	良	内外: 灰白5Y/1	重ね焼き痕
34	3001-02	灰釉陶器 椀	B-Q7 P2	3次	同	口径13.2 7.2 12/12	底部 内: 叩打子・施難(濁け剥離・自然難)	外: 叩打子、凹縁2条、系切り 内: 叩打子・施難(濁け剥離・自然難)	密 (微粉粒含)	良	内外: 灰白5Y/1	053 重ね焼き痕
35	3005-09	灰釉陶器 椀	B-V7 P1	3次	同	口径15.8 2/12	底部 内: 叩打子・輪花	外: 叩打子、輪花	密 (~2mm砂粒含)	良	内外: 淡黄2.5Y/2	輪花 古代等式?
36	3005-11	叩打土器 底部	B-U1 P4	3次	同	口径4.0前後 小片	外: 叩打子、系切り痕(摩耗者) 内: 叩打子	密 (~3mm砂粒含)	—	外: 淡黄2.5Y/4 内: 黄灰2.5Y/1		
37	3005-12	叩打土器 杯	B-Q8 P3	3次	同	底径5.6 9/12	底部 内: 叩打子(摩耗者)	外: 叩打子、打子、刃子、系切り痕 内: 叩打子	密 (~4mm砂粒含)	—	内外: 淡黄橙10YR8/4	
38	2002-01	綠釉陶器 椀	A-Y24 P1	2次	F3P1	—	小片	外: 叩打子・施難(口縁部の難は削 離)	密	良	素地: 灰白10Y/1 輪: 黄7.5Y/6.3	
39	2001-06	綠釉陶器 底部	A-Y24 P3	2次	F3P3	—	小片	外: 叩打子、貼付高台後打子・施難 内: 叩打子・施難	密	良	素地: 灰褐7.5YR6/2 輪: 浅黄7.5Y/3	
40	1006-02	綠釉陶器 底部	D-J4 砂少済	1次	J4 SD11	—	小片	外: 叩打子、貼付高台後打子・施難 内: 叩打子・施難	やや密	不良	素地: 灰白6/1 輪: 黄7.5Y/3	
41	2002-03	綠釉陶器 椀	A-X24 包含層	2次	E3 包含層	高台径 8.0 1/12	底部 内: 叩打子	外: 叩打子、貼付高台後打子・施難 内: 叩打子・施難	密	良	素地: にじいろ7.5YR6/4 輪: 浅黄7.5Y/4	
42	1006-04	須惠器 鉢	D-M5 包含層	1次	M5 接出面	—	小片	外: 叩打子	やや密 (~2mm砂粒含)	良	外: 灰白2.5Y/1～灰5Y/1 内: 灰白2.5Y/1	
43	3005-01	須惠器 杯	B-X5 包含層	3次	同	高台径 10.6 2/12	底部 内: 叩打子	外: 叩打子、貼付高台後打子、刃少 内: 叩打子	密 (~1mm砂粒含)	良	内外: 灰白7.5Y/7	
44	3005-03	灰釉陶器 椀	D-F7 包含層	3次	同	高台径 8.0 3/12	底部 内: 叩打子・施難	外: 叩打子、貼付高台後打子、刃少 内: 叩打子・施難	密 (~1mm砂粒含)	良	内外: 灰黄2.5Y/2	H72
45	3001-01	灰釉陶器 皿	B-R9 包含層	3次	同	器高2.6 高台径 6.8 4/12	底部 内: 叩打子	外: 叩打子、貼付高台後打子、系切り 痕・施難(濁け剥離)、刃少 内: 叩打子・施難(濁け剥離)	密 (~2mm砂粒含)	良	内外: 灰白2.5Y/1	H72 重ね焼き痕
46	2003-02	灰釉陶器 椀	C-B24 砂少	2次	K3D5 高台径 9.6 5/12	底部 内: 叩打子	外: 叩打子・貼付高台後打子、系切り 痕・施難(濁け剥離・自然難) 内: 叩打子・施難(濁け剥離・自然難)	密 (~3mm砂粒含)	良	素地: 灰5Y/1 輪: 黄5Y/3	053 重ね焼き痕	
47	3005-02	灰釉陶器 椀	B-R5 包含層	3次	同	高台径 15.4 1/12	底部 内: 叩打子	外: 叩打子、貼付高台後打子、刃少 内: 叩打子	密 (~1mm砂粒含)	良	内外: 灰白2.5Y/2	
48	3005-04	土器 埴燒	D-G1 包含層	3次	同	—	小片	外: 打子・刃子	密 (~2mm砂粒含)	—	内外: 陶赤褐色2.5YR/6	19世紀 尾張型
49	1007-01	石製品 磨石	D-K6 包含層	1次	K6 接出面	長径10.8 短径10.0 —	—	擦痕あり	—	—	にじいろ2.5Y/4 重量710g	
50	3004-02	鐵製品 刀子	B-R7 砂少済	3次	同	長4.2 幅1.5 厚さ0.3	—	—	—	—	—	木質片付着
51	3004-03	鐵滓	B-R8 砂少済	3次	同	長4.5 幅1.9 厚さ1.2	—	—	—	—	—	鉄錆跡治療
52	3004-01	鐵製品 平角刀	C-E25 砂少済	1次	E25 S025	長5.7 幅1.1 厚さ0.35	—	—	—	—	—	2箇所に打ち ひすみあり

第5表 広山B遺跡 出土遺物観察表②

# V 結語

## 1 遺構の変遷

### (1) 広山A遺跡

各遺構からの出土遺物が少なく、時期決定は難しい状況だが、周辺遺跡（広山B・西山・新野）と比較し検討した。

#### 古墳時代後期

この時期の遺物を伴う土坑が2基確認されている（SK10・SK12）。しかし、堅穴住居や掘立柱建物などは認められず、調査区内は居住域とはなっていなかったようである。

#### 飛鳥～奈良時代

掘立柱建物（SB5）が建つようになる。この時期に至り、ようやく居住の場となつたようである。

なお、SB5は、新野遺跡A地区のSB123と規模・柱間などに類似性がみられることから、この時期の建物とした。

#### 奈良～平安時代

掘立柱建物が3棟（SB6・SB7・SB15）建てられている。ただし、建物方位は統一されていない。隣接する広山B遺跡で同時期の建物の方位がそろっている状況を考えると、これら3棟は、同時存在ではない可能性が高いものと思われる。さらに、このなかでSB15は他の2棟に比べ、柱穴が小さく、柱の並びも悪いため、他の2棟との時期差はさらに大きいものと考えられる。

これら3棟の建物は、新野遺跡B地区の建物に規模・柱間などの類似性がみられることから、この時期の建物とした。

#### 鎌倉時代

調査区内に遺構は確認できなくなるが、この時期の無釉陶器碗（山茶碗<sup>1)</sup>）が、混入遺物としてSD14から出土している。当該期の遺構が近辺に存在する可能性がある。

これ以降は近世まで、遺構や遺物は確認できない。近世以降は畠地として利用され、今日に至つたものと思われる。

### (2) 広山B遺跡

#### 古墳時代後期

この時期の遺構は、調査区東端の土坑（SK17）のみである。SK17からは、7世紀前半の須恵器（1・2）が出土している。調査区内で居住跡は確認できなかったが、調査区西壁付近から混入遺物として、7世紀前半の遺物が多く出土しており（24～27）、調査区外の西方に、該当期の集落が存在する可能性がある。

なお、SK17は、谷へ落ちていく斜面上に位置することから、この時期のゴミ捨て場だった可能性がある。埋土に炭粒が多く含まれていることから、焼却処理もされていたようである。

#### 飛鳥～奈良時代

遺構の数は少ないが、調査区内で人の居住が始まつたことが分かる。

調査区の北に、7世紀末～8世紀前半の遺物（5～8）を伴うカマド跡（SF12）が確認されている。南には1棟であるが、掘立柱建物（SB6）があり、柱穴から8世紀前半のものとみられる須恵器が出土している。

#### 平安時代

調査区内に掘立柱建物などが多く建てられた時期である。掘立柱建物が10棟、柱列が3条、土坑が1基、確認されている。出土した遺物から、遺構は10世紀のものと考えられる。

遺構の配置や遺物の出土状況から、調査区外の西方に建物群の中心があると思われる。

検出された掘立柱建物と柱列は、2つのグループに大別できる。建物方位が、北から30°(±3°) 東に振れるグループ（SB7・SB8・SA9・SA10・SB19・SB21・SB22・SA24）と、北から18°(±3°) 東に振れるグループ（SB3・SB4・SB5・SB20・SB23）である。

第IV章で報告したように、柱穴出土の遺物から考えると、まず、N30°Eの建物群が建てられ、10世紀前半には、新たにN18°Eの建物群に建て替えられた

ことが分かる<sup>②</sup>。そして、N18° Eの建物群も10世紀後半には廃絶している。それ以降は、現代に至るまで、調査区内に建物跡と考えられる遺構は確認できない。しかし、N18° Eの地割は現在の畠地の地割にも踏襲されていることから、中世以降も、この地は畠地などとして利用されたものと思われる。

また、N18° Eという方位は、現在も桑名市志知付近に残る員弁郡の条里地割の方位（N18° ~20° E）とよく合う。員弁郡の条里地割の施行時期は、これまで明らかにされていないが<sup>③</sup>、広山B遺跡の建物群の変遷は、わずかな例ではあるが、それが10世紀前半まで遡れる可能性を示している。これは、天慶3（940）年に員弁郡が神宮に施入され、神郡となっていることと関係があるのかも知れない。しかし、神郡編入に伴う再開発と条里地割の施行については、まだまだ不明な点が多く、今後の神郡関連遺跡の調査や研究の進展を待ちたい。

なお、調査区の北端から出土した鉄滓（51）は、分析の結果、鍛鍊鍛冶滓であることが分かった<sup>④</sup>。わずか1点の出土であるが、この遺跡で鍛冶行為が行われた可能性がある。出土位置周辺の包含層からは7~10世紀の遺物が出土しており、この鉄滓も同時期のものである可能性が考えられる。西山遺跡や古代大金郷を考える上で重要である。

#### 近世～近代

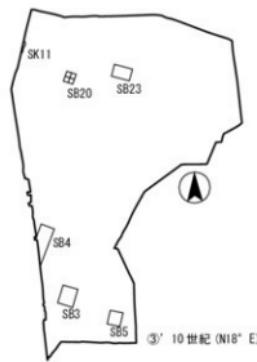
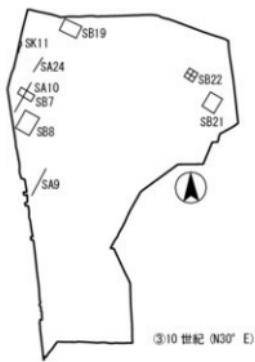
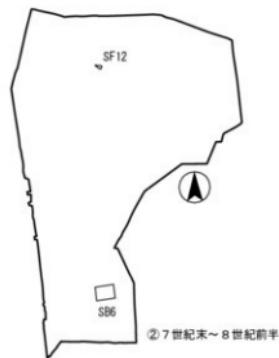
この時期の遺構として、土坑3基・井戸1基を検出している。内面に三和土<sup>たんわづち</sup>のようなものが貼り付いているものもあり、遺物は出土していないが、おそらく、近世以降の雨水溜か肥溜と考えられる。

近世以降も畠地や桑畠などとして利用され、今日に至ったものと思われる。

（勝山孝文）

#### 【註】

- ① 山茶梅の時期については、藤澤良祐「山茶梅研究の現状と課題」『研究紀要』第3号（三重県埋蔵文化財センター、1994年）を参照した。
- ② 第IV章でも記述したが、それぞれのグループの時期決定の根拠としたSA10とSB1の柱痕跡から出土した灰釉陶器は、SA10が折戸53窓式、SB1が東山72窓式である。
- ③ 『伊勢湾岸地域の古代条里制』（弥永貞三・谷岡武雄編、1979年）
- ④ 本報告書の『附図』を参照。



第22図 広山B遺跡 遺構変遷図 (1:1,200)

附 編



## 1 広山B遺跡出土鉄滓の蛍光X線分析

(財)元興寺文化財研究所

### 1. 分析対象

広山B遺跡（第3次）出土鉄滓

（預2008-0100 No.3）

### 2. 分析内容

ダイヤモンド替刃を備えたバンドソーにて鉄滓の切断を行った。蛍光X線分析装置により定性分析し鉄分の存在を確認後、株式会社九州テクノリサーチによる詳細な分析が行われた。

### 3. 使用機器及び原理

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）（SIIナノテクノロジー社製SEA5230）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

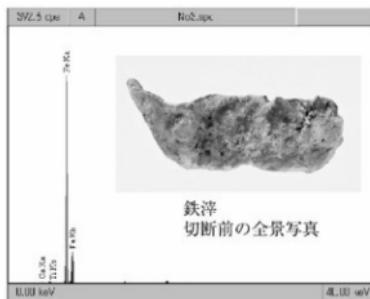
金属の同定で使用される励起電圧45kV、コリメータ径φ1.8mm、大気圧下にて測定した。なお、X線管球はモリブデン（Mo）である。（詳細な測定条件は、第6表参照）

### 4. 結果

鉄滓No.3のXRF分析チャートを第23図に示し、第7表にその結果を掲げる。XRF分析の結果から、鉄(Fe)が強く検出されたため、これらを鉄分析試料とした。詳細は、「2 広山B遺跡出土鉄滓の金属学的調査」を参照のこと。

鉄滓	No.3
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	214
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	20

第6表 鉄滓切断面XRF測定条件



第23図 鉄滓切断面のXRF分析チャート

Z	元素	元素名	ライン	No.3 (cps)	R O I (keV)
20	Ca	カルシウム	K $\alpha$	10,279	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K $\alpha$	11,887	4.35-4.66
26	Fe	鉄	K $\alpha$	2567,306	6.23-6.57

第7表 鉄滓切断面のXRF測定結果

## 2 広山B遺跡出土鉄滓の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

### 2.1 供試材（第8表）

鍛冶滓1点の調査を行った。

### 2.2 調査項目

#### (1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の觀察所見を記載した。この結果をもとに、分析試料の採取位置を決定している。

#### (2) マクロ組織

### 1. いきさつ

広山B遺跡は三重県員弁郡東員町に所在する。発掘調査北端で鍛冶滓が1点出土している。周辺部の包含層からは7世紀～10世紀の遺物が多数出土しており、鍛冶滓も同時期の遺物の可能性が考えられる。この鍛冶滓の性状を詳しく検討するため、金属学的調査を行う運びとなった。

### 2. 調査方法

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

### (3) 顕微鏡組織

鉛滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μと1μで鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

### (4) ピッカース断面硬度

ピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉛滓中の晶出物の判定を行った。また金属組織（合金相）の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は100gfで測定した。

### (5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これをを利用して、各相の組成の

違いを確認後、定量分析を実施している。

### (6) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法  
二酸化硅素（SiO<sub>2</sub>）、酸化アルミニウム（Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K<sub>2</sub>O）、酸化ナトリウム（Na<sub>2</sub>O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）、酸化クロム（Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、五酸化磷（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO<sub>2</sub>）：ICP  
( Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

### 3.調査結果

#### (1) 肉眼観察

小型で不定形の鍛治滓破片である。滓の地の色調は黒灰色で、表面に茶褐色の鉄化鉄が点々と付着する。特殊金属探知機のM（◎）で反応があるため、内部には金属鉄が存在する可能性が考えられる。表面の気孔は少ないが、軽い質感の滓である。

#### (2) マクロ組織（第24図①）

断面観察位置ではまとまった金属鉄部ではなく、滓中に微細な鉄化鉄部が散在する状態であった。また内部は風化による侵食空隙と不定形の気孔が多数散在する。

#### (3) 顕微鏡組織（第24図②～⑤）

白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite : FeO）、淡灰色柱状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO<sub>2</sub>）が、素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛治滓の晶癖である。また滓中にはごく微細な明白色の金属鉄や、灰色の鉄化鉄部が多数散在する。

#### (4) ピッカース断面硬度

紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目							備考	
					大きさ(mm)	重量(g)		ピッカース 組織	鏡面 組織	新面 硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度 加熱	—	
No. 3	庶山B	B-R8ガラス	鉛治滓	古代？	46×19×13	17.3	M(◎)	○	○	○		○	○			

第8表 供試材の履歴と調査項目

したが、淡灰色柱状結晶の調査を行った。硬度値は508Hvとファイアライトの文献硬度値600~700Hv<sup>3</sup>より、かなり軟質の値であった。風化の影響を受けている可能性が高い。

#### (5) EPMA調査 (第24図⑥)

写真⑥に洋部の反射電子像 (COMP) を示す。3の淡灰色柱状結晶の定量分析値は67.5%FeO-30.8%SiO<sub>2</sub>であった。ファイアライト (Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>) に同定される。また4の白色粒状結晶の定量分析値は98.1%FeOであった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。5の素地部分の定量分析値は39.1%SiO<sub>2</sub>-15.5%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-10.4%CaO-6.8%K<sub>2</sub>O-25.6%FeOであった。非晶質珪酸塩 (ガラス質洋) で、鉄分 (FeO) をかなり固溶する。

#### (6) 化学組成分析 (第9表)

全鉄分 (Total Fe) 49.42%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第1鉄 (FeO) 33.34%、酸化鉄含みで、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 33.52%の割合がやや高め傾向にあった。造洋成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) は25.24%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は1.54%と低値である。砂鉄起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.18%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。酸化マンガン (MnO) も0.09%、銅 (Cu) <0.01%と低値である。

#### 4まとめ (第10表)

広山B遺跡出土鍛治洋は、酸化鉄 (FeO) 及び炉材 (羽口・炉壁) ないし鍛接剤起源の造洋成分 (SiO<sub>2</sub>, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>主成分) で構成される。分析調査前には、鎌などの鉄製品の可能性も指摘されていたが、まとまっ

た金属鉄部は確認されず、鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じた、鍛鍊鍛治洋 (低温成型素延べ洋) と推定される。

#### [註]

① メタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を、非破壊で推定するため調整された、特殊金属探知機を使用した判定法のことを指す。感度は三段階 [H: high (○)、M: middle (◎)、L: low (●)] に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。

特殊金属探知機の詳細な仕様は、以下の文献に記載されている。

穴澤義功「鉄生産遺跡調査の現状と課題—鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について—」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』(社)日本鉄鋼協会・社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム 鉄関連遺物分析評価研究グループ 2005

② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968、ウスタイトは450~500Hv、マグネタイトは500~600Hv、ファイアライトは600~700Hvの範囲が提示されている。

符号	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化 第1鉄 (FeO)	酸化 第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	珪素 (SiO <sub>2</sub> )	二酸化 アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化 カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化 ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化 マanganese (MnO)	二酸化 チタン (TiO <sub>2</sub> )	珪素 (SiO <sub>2</sub> )	二酸化 アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化 マanganese (MnO)	二酸化 チタン (TiO <sub>2</sub> )	珪素 (SiO <sub>2</sub> )	二酸化 アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化 マanganese (MnO)	ガラス質 洋	Cu	I *		
																						Total SiO <sub>2</sub>	Total Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Total MnO
No.3	49.42	0.06	33.34	33.52	19.83	3.38	1.11	0.43	0.43	0.06	0.09	0.18	0.02	0.094	0.17	0.23	<0.01	<0.01	<0.01	25.24	0.511	0.004		

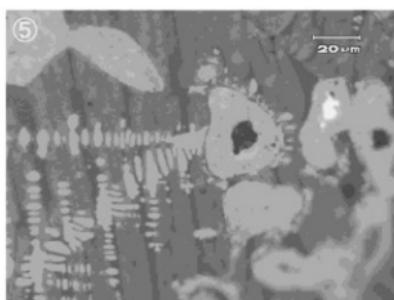
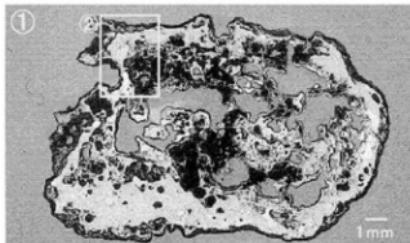
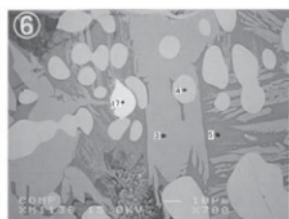
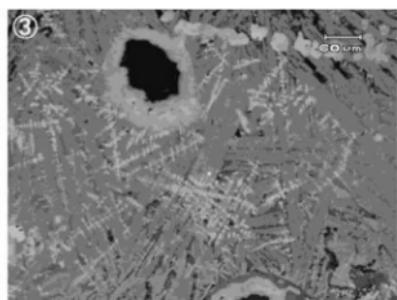
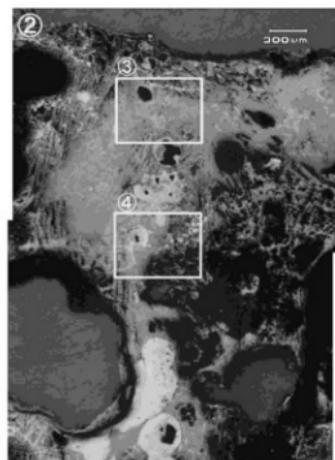
第9表 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名	推定年代	組合せ相違	化学組成 (%)								所見
						Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	珪基性 成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	ガラス質 洋	Cu	
No.3	広山B	B-9005引溝	鐵洋	古代?	澤部: ウスタイト・ファイアライト、細小金属質、酸化鉄	49.42	33.32	1.54	0.18	<0.01	0.08	25.24	<0.01	鍛鍊鍛治洋 (低温成型素延べ洋)

第10表 出土遺物の調査結果のまとめ

No.3 銀治滓

- ①マクロ組織
- ②上面拡大
- ③・④ ②の拡大
- ⑤ ④の拡大
- ⑥ 反射電子像  
滓部:ウスタイト・ファイヤライト



定量分析値

Element	3	4	5	Element	17
K <sub>2</sub> O	0.013	0.022	6.795	O	0.137
Na <sub>2</sub> O	0.069	0.012	0.759	Sr	0.064
CuO	—	—	0.031	Cu	0.006
MnO	0.575	0.074	0.017	As	—
CaO	0.872	—	10.404	P	—
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.141	0.794	15.471	Ti	0.025
FeO	67.525	98.115	25.579	Fe	100.586
SiO <sub>2</sub>	30.819	0.441	39.102	V	0.005
TiO <sub>2</sub>	0.042	0.356	0.321	Mn	0.015
S	0.041	0.002	0.070	Total	100.838
MnO	0.266	0.154	0.082		
As <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.007	—	—		
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	—	0.022	0.073		
ZrO <sub>2</sub>	0.011	—	0.011		
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	—	0.004	—		
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.026	0.073	0.030		
Total	100.397	100.069	98.728		

第24図 銀治滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

## 写 真 図 版



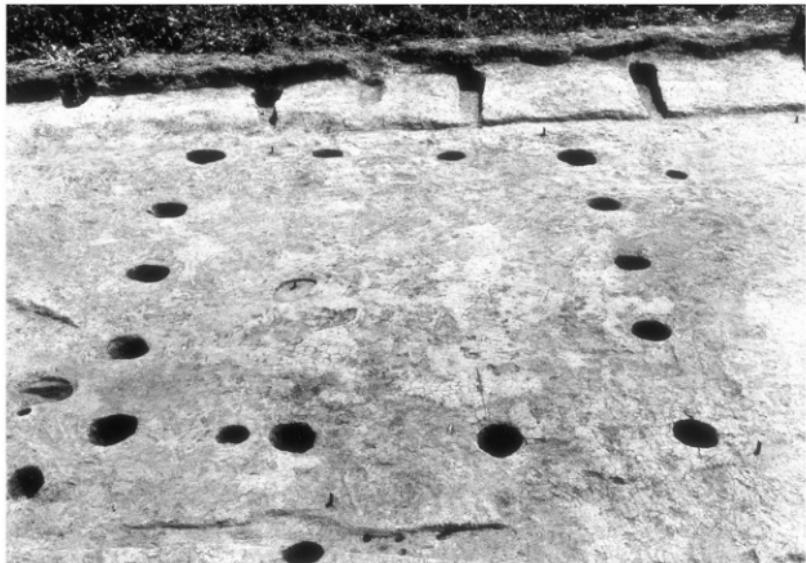


広山A遺跡 調査区全景（南から）

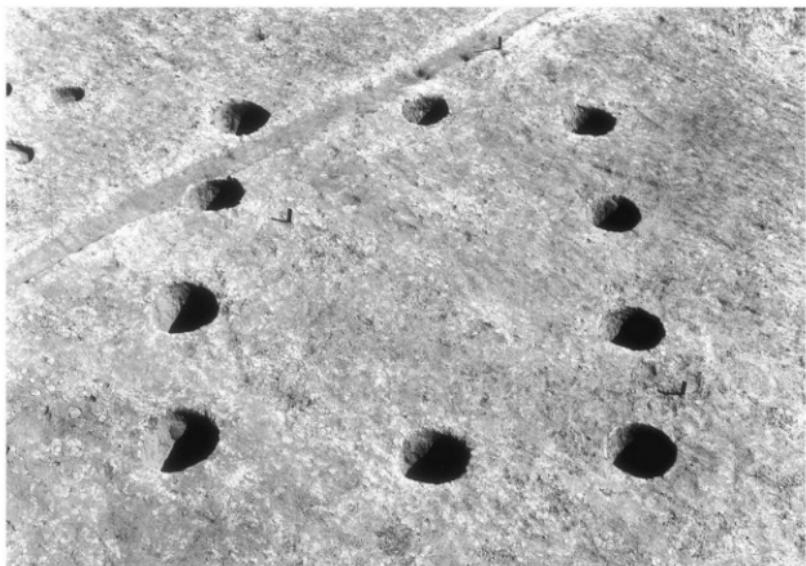


広山A遺跡 SK 4（西から）

写真図版 2



広山A遺跡 S B 5 (西から)



広山A遺跡 S B 6 (北西から)



広山A遺跡 SB 7 (西から)



広山A遺跡 SK 10 (南東から)

写真図版 4



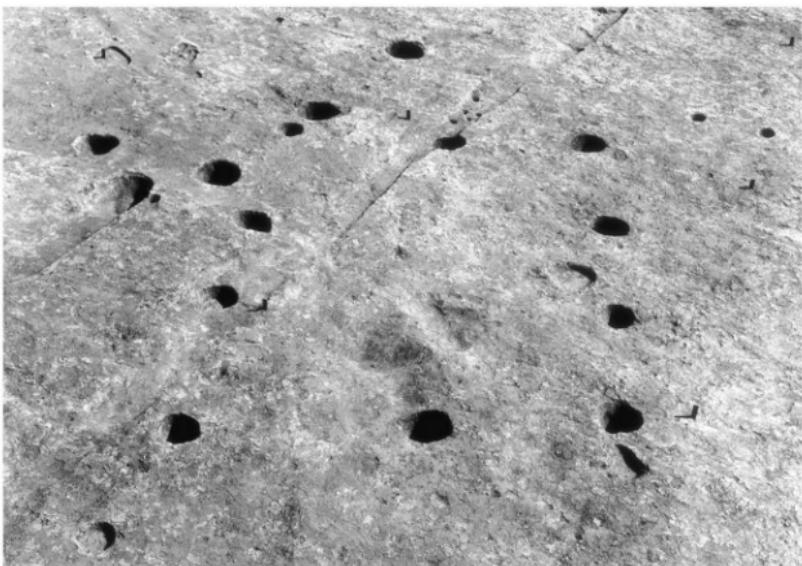
広山A遺跡 SK12（北から）



広山A遺跡 SB6・SK10・SK12（北から）

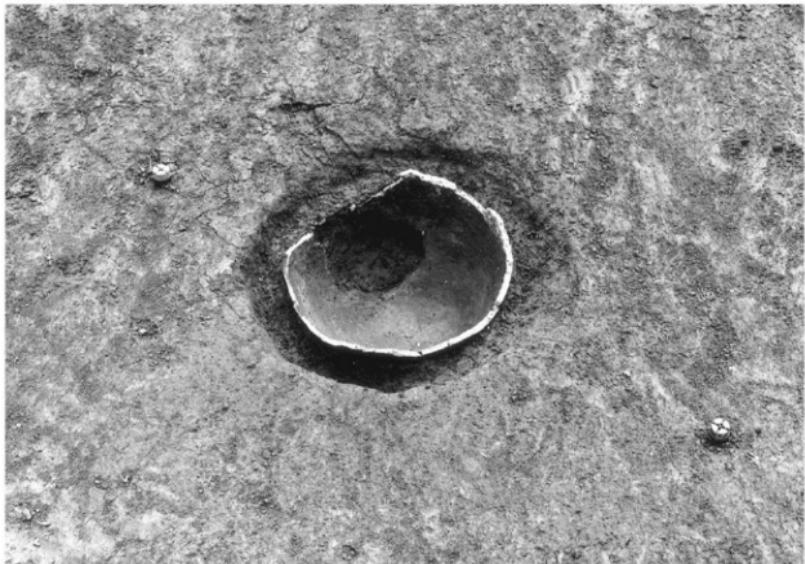


広山A遺跡 水溜（西から）

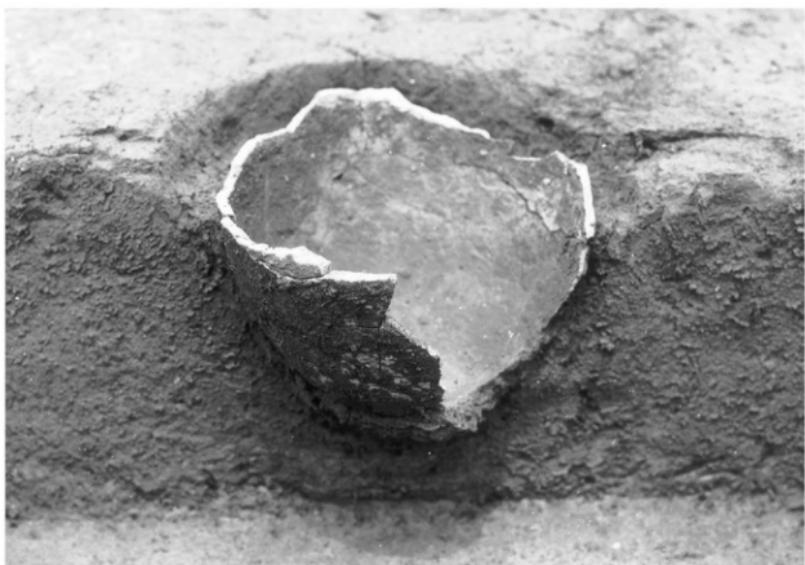


広山A遺跡 S B 15（北西から）

写真図版 6



広山A遺跡 S X16 (東から)



広山A遺跡 S X16埋設土器 (8) (東から)



写真図版 8



広山B遺跡 調査区遠景（西から）



広山B遺跡 第1次調査区全景（南から）



広山B遺跡 第2次調査区全景（南東から）



広山B遺跡 第3次調査区全景（南から）

写真図版10



広山B遺跡 SB 2・SB 3・SB 5・SB 6（西から）



広山B遺跡 SB 4（東から）



広山B遺跡 SB 7・SB 8・SA 10（北東から）



広山B遺跡 SF 12（東から）

写真図版12



広山B遺跡 S B 19 (西から)



広山B遺跡 S B 20 (東から)



広山B遺跡 S B21 (北西から)



広山B遺跡 S B22 (北西から)

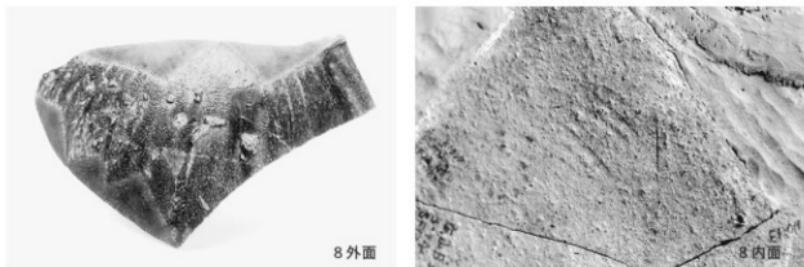
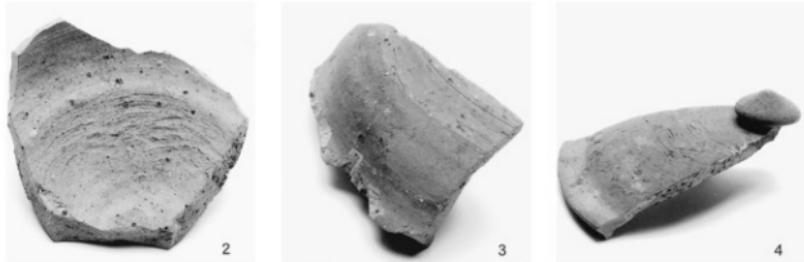
写真図版14



広山B遺跡 調査前風景（南から）

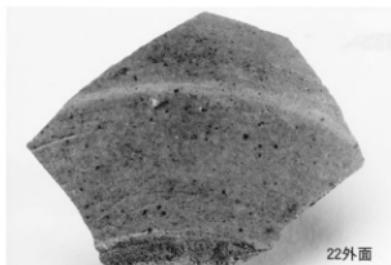
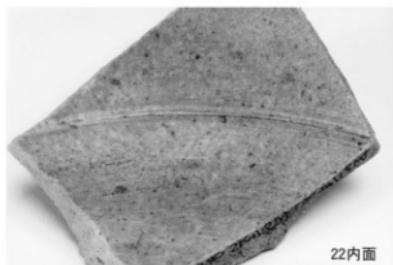
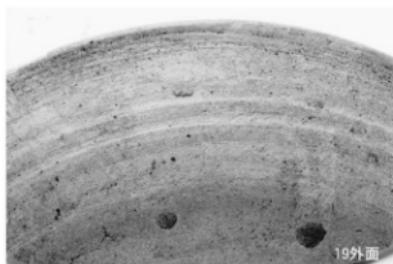


広山B遺跡 調査後風景（南から）



広山B遺跡 出土遺物①

写真図版16



広山B遺跡、出土遺物①



24



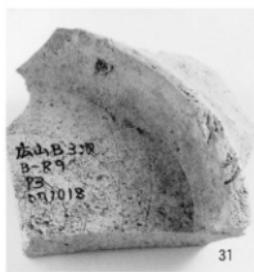
27



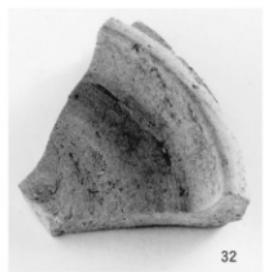
26 内面



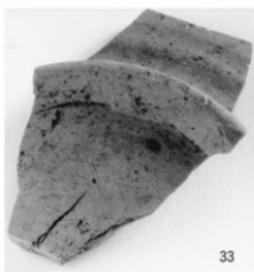
30



31



32



33



35



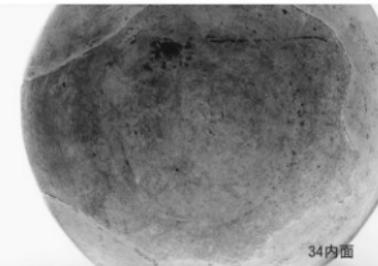
37

広山B遺跡 出土遺物③

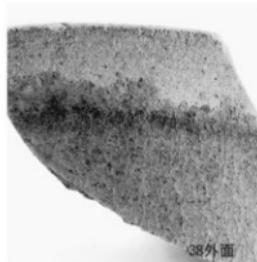
写真図版18



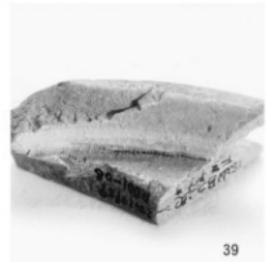
34外面



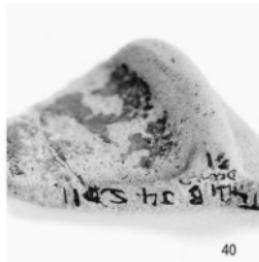
34内面



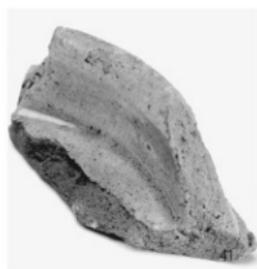
38外面



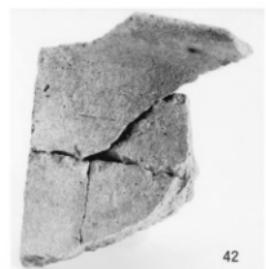
39



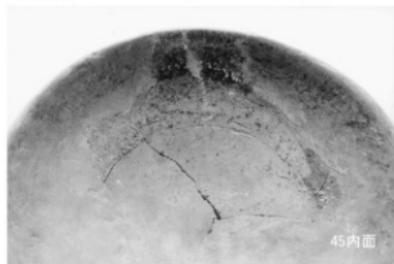
40



42



44



45内面



45外面

広山B遺跡 出土遺物④



46外面



46内面



47



48



49



50



50



51



51



52



52

広山B遺跡 出土遺物⑤



## 報告書抄録

ふりがな	ひろやまえーいせき・ひろやまびーいせきはっくつちょうきほうこく									
書名	広山A遺跡・広山B遺跡発掘調査報告									
副書名										
卷次										
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告									
シリーズ番号	186-7									
編著者名	今尾宏記・角正芳浩・山口聰嗣・勝山孝文									
編集機関	三重県埋蔵文化財センター									
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503				TEL 0596-52-1732					
発行年月日	2009年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因			
市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″	° ′ ″						
ひろやまえーいせき 広山A遺跡 いなべぐんとういんちょう 員弁郡東員町 ながふけあざひろやま 長深字広山ほか	24324	34	35° 03'	136° 35'	20000607 ~20001012	1,280	一般国道475号 東海環状自動車道建設事業			
ひろやまびーいせき 広山B遺跡 いなべぐんとういんちょう 員弁郡東員町 ながふけあざひろやま 長深字広山	24324	55	35° 03'	136° 35'	20000705 ~20001010	930				
			43"	14"	20010912 ~20011028	500				
					20070927 ~20071211	2,869				
					合計	4,299				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
広山A遺跡	集落跡	飛鳥～平安時代	掘立柱建物4棟 土坑6基 埋葬遺構1基	須恵器 土師器						
広山B遺跡	集落跡	飛鳥～奈良時代 平安時代	掘立柱建物13棟 柱列3条 土坑5基 カマド1基	須恵器 土師器 灰釉陶器 緑釉陶器 鉄滓						
要約	広山A遺跡	飛鳥～平安時代までの掘立柱建物4棟、土坑6基、埋葬遺構1基を確認した。								
	広山B遺跡	7世紀前半の土坑1基、7世紀末～8世紀前半の掘立柱建物1棟・カマド1基、10世紀の掘立柱建物10棟・柱列3条・土坑1基、近世～近代の井戸1基・土坑3基、時期不明の掘立柱建物2棟を確認した。10世紀の建物は員弁郡の条里型地割の方向と一致するものがある。								

---

三重県埋蔵文化財調査報186-7

一般国道475号東海環状自動車道

ひろやま ひろやま  
広山A遺跡・広山B遺跡発掘調査報告

—員弁郡東員町長深所在—

2009（平成21）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 (有)山文印刷

---